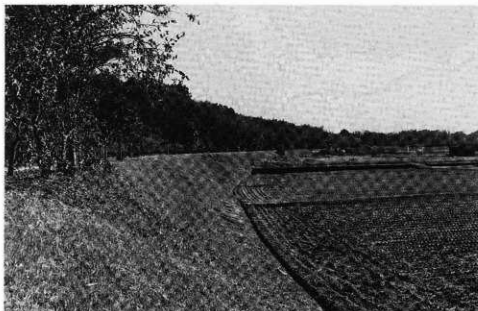


第19図 美乃利遺跡周辺の微地形



第20図 野口段丘崖

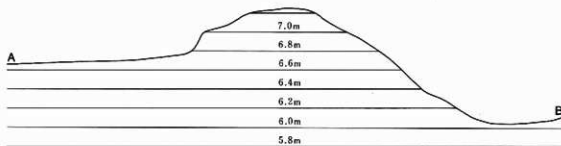
面を中心に微地形の復原を試みたい。

1/2,500
スケール

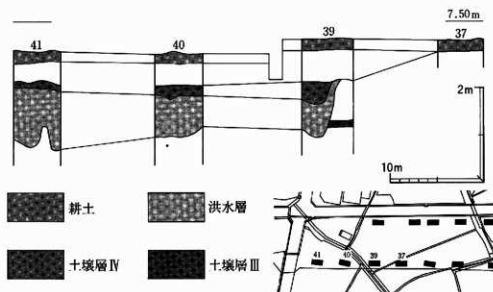
1/2,500都市計画図をベースに10cm等高線を復原したのが第19図である。これによると、当遺跡が立地するあたりにほぼ南北方向に舌状に張り出す微高地を認めることができる。この微高地は、後述するように埋没自然堤防を反映したものである。主軸方向で約800m、その直交方向で約300mを測り、西側は用水路を中心とした谷状を呈し、東側も川こそ流れていないが大きな谷地形となっている。因みに、微高地中央部（尾根部）を基準とした比高差は西側で約50cm、東側で約1.2mと、東側に大きく落ち込んでいる。

高橋 学の地形分類によると、当遺跡は完新世段丘Ⅰ面自然堤防帯後背湿地に位置している。そして、今回の調査区の北西側、V区の北西側の用水路は、埋没する完新世段丘Ⅰ面の段丘岸と平面的に一致するものと推定される。当微高地の西側の等高線がかなり乱れているのは、段丘崖以西が中世以降の氾濫原となっているためと考えられる。

ただし、この埋没段丘は完全には埋没しておらず、現地表面の観察において、用水路を挟んで約30cmの比高差となって現れている（第23図）。



第21図 微高地横断面



第22図 確認調査柱状図

また、上記のことは、確認調査の結果（第22図）においても認めることができる。つまり、この用水路を挟んで南東側（トレンチNo.37・No.39）と北西側（トレンチNo.40・No.41）とでは層序が大きく異なり、北西側のトレンチは洪水による堆積層からなり、南東側の土層を切る形で堆積している。

小字 さらに、第11図を参照すると、この用水路が小字境となっている。そして、北西側の小字は「古河内」と旧河道を表す小字名となっており、確認調査の結果と対応する。

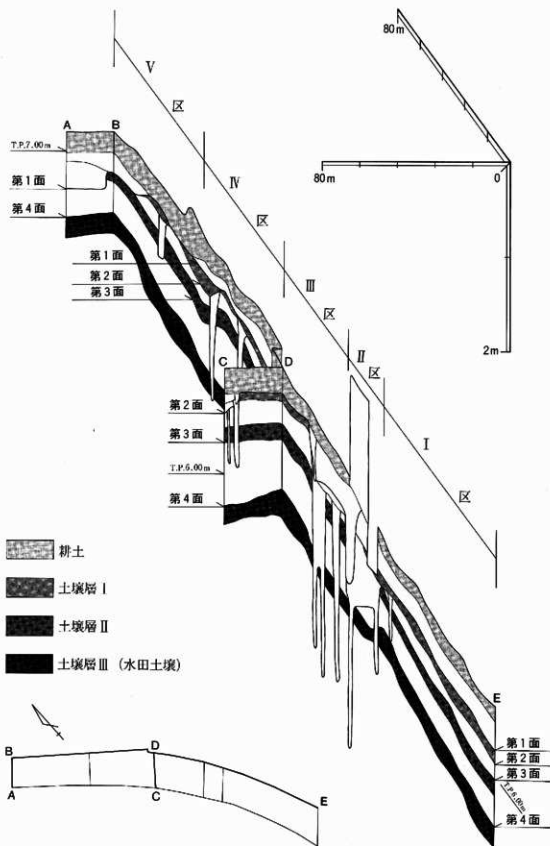
調査位置 次に上記の微高地における調査位置をみてみたい。第10図によると、調査区は南東（Ⅰ区）から北西方向（Ⅴ区）に緩やかにカーブしているが、概ね微高地の縁辺部（Ⅰ区）から尾根部（Ⅴ区）にかけて設定されていることがわかる。

つまり、直線的ではないものの、おおむね微高地の主軸方向に対して直交する方向に調査区が設定されているものと理解できる。よって、今回の調査は、結果として、美乃利遺跡が立地する舌状に張り出す微高地に対して直交する方向、すなわち紡錘形をなすと推定



第23図 宛新世段丘崖

第1節 調査の概要



第24図 美乃利遺跡基本土層図

される集落を横断するようにトレンチを設定し、調査を行った形となっている。

1/1,000 上記のことは、調査区周辺部を1/1,000の工事用図面をベースとした10cm等高線図(第11図)においても明確である。これによると、Ⅳ区からⅤ区にかけてが微高地の尾根部にあたり、Ⅰ区へ行くほど谷部へ近づいていく。

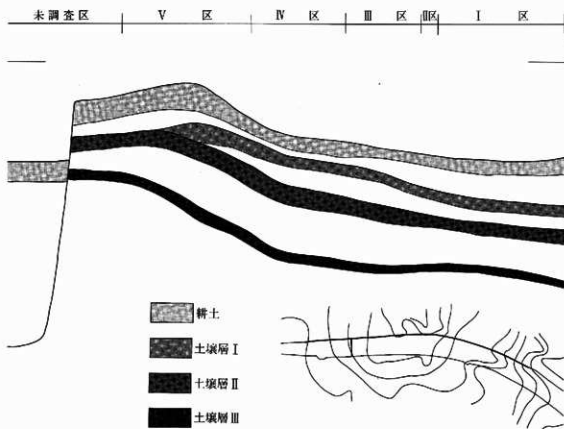
現地表面の標高は、Ⅳ区からⅤ区にかけての最高部で7.19m、Ⅰ区南東部で6.74mと、45cmの比高差が認められる。

3. 基本層序と遺構の検出

土壌層 確認調査において、5層~12層の旧表土層(土壌層)を確認した。このなかで、特に土壌化が顕著で、かつ、確認調査においてその上面あるいは下面において遺構の検出が可能と判断した土壌層を3層確認した(第24図)。上から「土壌層Ⅰ」「土壌層Ⅱ」「土壌層Ⅲ」と呼称する。

これらの土壌層は、基本的にⅠ区からⅤ区を通して共通して認められる層である。そして、第24図をもとにこれらの土壌層のみを抽出したのが第25図である。これにより、各土壌層とも、Ⅴ区のほぼ中央部に向かって各土壌層のレベルが高くなる傾向を読み取ることができる。そして、その傾向は第19図でみたコンター図と一致する。

埋没自然堤防 これは、土壌層Ⅲの下層にいくつかの中州を形成する礫層があり、この中州間の谷を埋めるように自然堤防が形成されていることによるものと考えられる。そして、この埋没自然堤防が、第19図で認められた微高地の基礎となっているものと考えられる。その後、こ



第25図 土壌層と埋没段丘

の埋没自然堤防の縁辺部を中心に埋没することにより、現地表面で観察できるような平坦な地形となってきた。このため、Ⅰ区（南東）へいくほど土壌層間の間層も厚くなる傾向が認められる。逆にⅤ区においては、土壌層Ⅰと土壌層Ⅱの間層がなくなり、西端部では両層の分層が困難となっている。さらに、一部では土壌層Ⅰ自体が削平を受けることにより平坦化している。

水田土壌 なお、上記3層の土壌層のうち土壌層Ⅱと土壌層Ⅲについては、その層相から水田土壌であるとの判断にいたった。調査後に、各層の土壌資料をサンプリングしプラントオパール分析を行い、水田土壌との結果がでている（第4章第8節）。

遺構の検出 ところで、土壌層はある時期の地表面を表わすものである。したがって、基本的には土壌層の上面において人間の営みが行われていたものと考え

るべき、つまりこの上面で遺構を検出してしかるべきである。しかし、遺構の検出は色調の識別を基本とするため、当遺跡では土壌層上面での土壌化した埋土を含む遺構の検出は困難である。そこで、遺構の検出にあたっては、土壌化した部分（土壌層）を除去し、明色となった面（土壌層の下面）で遺構の検出をおこなった。したがって、この面は遺構を検出した任意の面であって、厳密には当時の地表面を意味するものではない。

ただし、埋土が土壌層そのものの色調と明らかに異なる場合はこの限りではなく、土壌層上面における遺構検出も可能である。後述するように、当遺跡においても、このような条件で遺構を検出している。第1面がその該当例である。

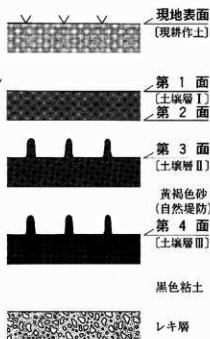
水田土壌 また、水田土壌層についても、土壌層の上面で検出しなければ調査にならない。水田土壌層と判断した土壌層Ⅱと土壌層Ⅲについては、確認調査の結果、上面での調査が可能との結論に至り、水田面の検出をおこなった。

基本層序 以上の基本認識のもと、3層の土壌層の上面あるいは下面で遺構の検出を行った。具体的には、土壌層Ⅰの上面と下面、土壌層Ⅱの上面もしくは下面、土壌層Ⅲの上面の4面に分けて調査を行った（第26図）。そして、この4面は各地区に共通するものである。

なお、同じ検出面においても埋土の違いあるいは遺構の性格の違いから地区によっては2回に分けて調査を行った面がある。これらの面については、各地区に共通する「第1面」「第2面」「第3面」「第4面」の呼称の後に、「第1面(1)」「第1面(2)」のように枝番を付けて呼称することにする。

各土壌層と遺構検出面との関係は以下の通りである。

第1面 土壌層Ⅰの上面で検出した面である。水田土壌層ではないが、黒褐色系の土壌層に対して埋土が灰色系であることから遺構を検出することができた。Ⅱ区～Ⅳ区においては、埋土の相違・遺構相互の切り合い関係などをもとに2回に分けて調査を行った。

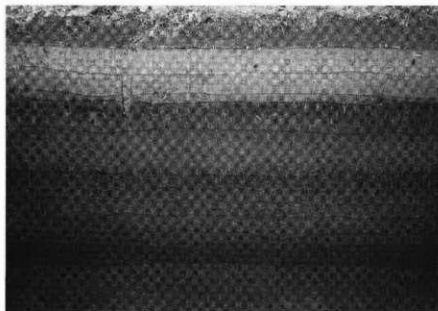


第26図 基本層序図

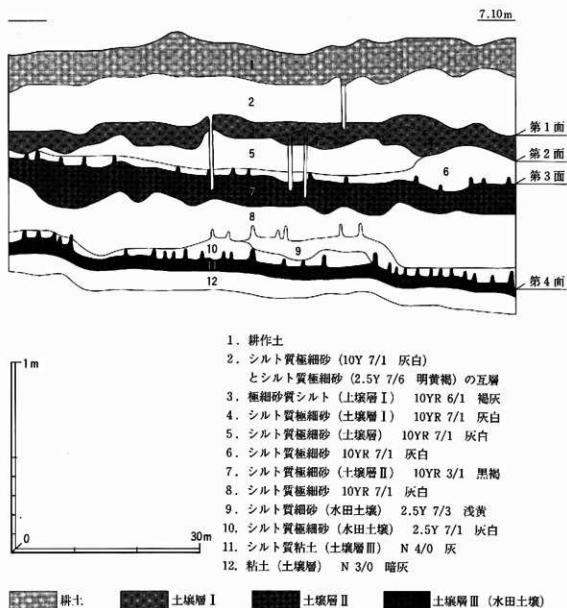
- 第2面 土壌層Ⅰの下面で検出した面である。遺構の埋土が土壌層Ⅰと同じく黒褐色系を呈するため土壌層Ⅰの上面での検出が不可能であると判断し、その下面で遺構を検出した。
- 第3面 土壌層Ⅱの上面で検出した面である。当土壌層は、Ⅰ区からⅢ区にかけては水田土壌であり、かつこの土壌層の上に黄褐色系の洪水砂が堆積していたため、当層上面での検出が可能となった。ただし、Ⅲ区の一部およびⅣ区・Ⅴ区においては水田土壌から一般的な土壌層に変化しているため、土壌層の下面で遺構の検出をおこなった。また、Ⅰ区においては2回に分けて（第3面(1)・第3面(2)）調査をおこなっている。
- 第4面 土壌層Ⅲの上面で検出した面である。当土壌層についても、土壌層Ⅱと同様、水田土壌であり、かつ当層の上に黄褐色系の洪水砂が堆積していたことから、当層上面での検出が可能となった。
- なお、より具体的な層序・土壌層の形成時期等については、各地区ごとに説明する。

〔注〕

- (1) 田中眞吾「播磨の地形の成り立ちと特色」『播磨の地理 自然編』田中眞吾編著 神戸新聞総合出版センター 1994
- (2) 田中眞吾「加古川市付近の地形と地質」『加古川市史 第一巻』兵庫県加古川市 1989



第27図 美乃利遺跡基本土層



第28図 I区基本土層

第2節 I区の調査

1. 調査の概要

(1) 基本層序

前節で報告した当遺跡全体に共通する基本層序が、当調査区全域で認められる（第28図）。しかし、微高地の傾斜地に位置するため、全体的に南東側へ低くなる傾向にある。

上から、現耕作土、土壌層Ⅰ、土壌層Ⅱ、土壌層Ⅲと4層の土壌層が確認でき、各土壌層間に間層が顕著に認められる。

現耕作土

当遺跡の現地表面をなす水田土壌層である。

現耕作土と下層の土壌層Ⅰの間は、灰白色シルト質極細砂と明黄褐色シルト質極細砂の互層となっている。前者は水田土壌層、後者はその床土にあたり、両者の互層は多い箇所では5帯認められる。

土壌層Ⅰ

細かく観察すると、褐灰色極細砂質シルトと灰色シルト質極細砂の2層からなる。後者は南側の一部に限られるもので、層位的に前者の下層になる。断面観察においては両層を識別できたが、平面的には明確に識別できなかった。しかし、断面観察において後者の層の上面から切り込む遺構は認められなかった。

土壌層Ⅰの下層は、灰白色シルト質極細砂が2層認められる（第28図 5層・6層）。前者は、基本的には土壌層Ⅰと同一堆積によるもので、若干土壌化が認められる。後者は全く土壌化が認められない層で、洪水に伴うものと考えられる。当層は北側ほど薄くなっている。

土壌層Ⅱ

黒褐色シルト質極細砂1層からなる水田土壌層である。

土壌層Ⅱの下層は、上から灰白色シルト質極細砂、浅黄色シルト質細砂、灰白色シルト質極細砂の3層からなる。灰白色シルト質極細砂は、土壌層Ⅱと同一堆積からなる層である。浅黄色シルト質細砂と灰白色シルト質極細砂の両層は水田土壌層で、土層観察では畦畔状の高まりを確認することができた。ただし、両層は比較的広範囲に認められるものの、畦畔状の高まりが認められるのは当調査区中央部に限られ、面的には検出できなかった。

土壌層Ⅲ

灰色シルト質粘土1層からなる水田土壌層である。この下層は暗灰色粘土である。当層についても、顕著な攪乱が認められるが、水田土壌ではなく、ヨシ類等によるものと考えられる。なお、部分的にはあるが、当層の約1m～1.5mでは隙層を確認している。



第1面



第2面



第3面



第4面

第29回 I区の遺構

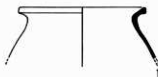
(2) 土壌層と遺構の検出

大きく、第1面から第4面の4面にわたって遺構を検出している。

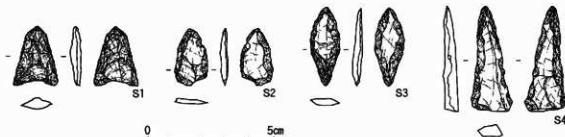
第1面 土壌層Ⅰの上面で検出した遺構で、その埋土は灰色系を呈する。主な遺構は、中世後半以降と考えられる鋤溝を検出している。

第2面 土壌層Ⅰを掘削し土壌化していない灰色シルト質極細砂(第28図 5層・6層)の上面で検出している。検出した遺構のなかで判断可能な時期は、弥生時代中期後半・弥生時代後期・古墳時代前半・奈良時代である。

当面を検出する際に出土した土器のなかにおいても最も古く位置付けられるのも弥生時代中期の甕(第30図-1)である。また、石器(第31図S1-S4)についても、ほぼ当該期を示すものである。したがって、当遺構面に伴う遺構は、弥生時代中期以降と考えられる。



第30図 I区第2面出土土器



第31図 I区第2面出土石器

第3面 土壌層Ⅰの下層にある若干土壌化した灰白色シルト質極細砂を掘削したレベルで検出している。当初は、次の第3面(2)の土壌層Ⅱ上面にあたる水田畦畔を検出するため、土壌層より若干上面で平面的に調査した際に、偶然溝状の遺構を確認した。このため、この面を第3面(1)とし、この面で畦畔を確認した土壌層Ⅱ上面を第3面(2)とする。

第3面(1)においては、弥生時代前期の溝を数条検出している。埋土内から若干の弥生前期の土器が出土しており、これが、後述する第3面(2)・第4面の水田跡の時期を論ずる根拠となっている。

第3面(2)では水田跡を検出した。前述したように、弥生時代前期の溝を検出した第3面(1)より下層であることから、弥生時代前期と判断した。また、当遺構面を検出する際に出土した石器(第32図-S5)の形態からも、首肯できるものと考えられる。小区画水田に分類されるものであるが、平面形は方形を指向するものの、後述する第4面検出の水田跡と比較すると、一定ではない。



第32図 I区第3面出土土器

第4面 土壌層Ⅲの上面で検出している。第3面(2)同様、水田跡を検出した。第3面(2)とは異なり、平面方形を指向したかなり整然とした小区画水田である。弥生時代前期と判断した第3面(2)の水田跡より古いことは確実であるが、より細かな時期の特定は困難である。

第2節 I区の調査

2. 第1面の調査

(1) 概要 (図版1 写真図版3)

当遺構面で検出した遺構は、鋤溝に限られる。

(2) 調査の結果

鋤 溝

検出状況 I区第1面全域で小規模な短い溝が検出され、鋤による耕作跡（鋤溝）と考えた。

形状・規模 溝の方向は北西から南東にそろっており、N47°Wを指向する。長さは50cm～5mとばらつきがある。幅は検出面で20～30cm、溝底で5～10cmを測る。断面は浅いU字形を呈し、検出面からの深さは3～6cmである。

埋土は灰白色の洪水砂である。若干の上器・石器が包含されていた。

出土遺物 土器の小片が出土している。

時 期 出土遺物から、中世後半以降と考えられる。



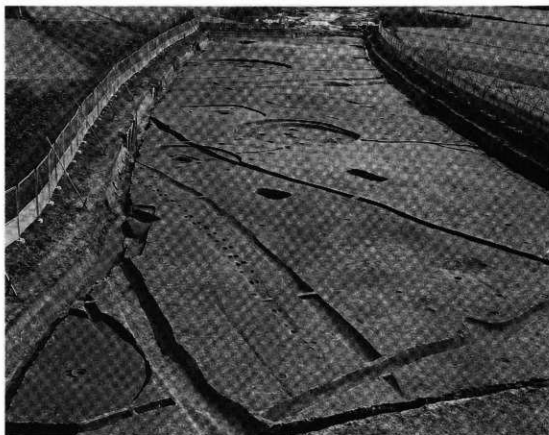
第33図 I区第1面

3. 第2面の調査

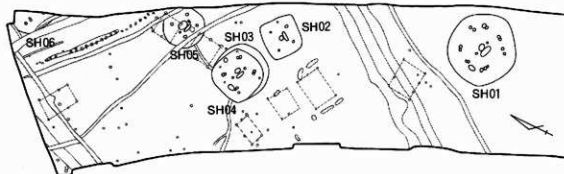
(1) 概要 (図版2 写真図版4・5)

概要

第2面で検出された遺構は、円形の住居跡5棟(内1棟は建て替えを含む)、方形の住居跡1棟、掘立柱建物跡6棟、土坑7基、溝14本である。最も大型の住居跡であるSH01より南に遺構は確認されていない。特に堅穴住居SH02～SH05や掘立柱建物SB02～SB06は近接した位置にあり、この付近に遺構が集中している。また、掘立柱建物SB02の両脇には、建物に付随するように土坑SK01・SK02・SK05・SK06が検出されている。また、溝は北東から南西に流れるものと、北西から南東に流れるものとの2通りが認められる。この面で検出された遺構の時期は、弥生時代中期から奈良時代にかけてである。



第34図 I区第2面



第35図 I区第2面 住居跡

(2) 調査の結果

I. 住居跡

SH01 (図版3～5 写真図版6・7・109・110・174)

検出状況 I区が一番南側に単独に存在する(第35図)。遺構は完存する。主柱穴が2個ずつ対称存在することから1回の建替えがあったと思われるが、周壁溝は部分的に二重になるだけで、中央土坑は共通していたようである。

形状・規模 平面形は円形を呈する。中央土坑の方位はN71°Wである。
規模は径8.30mである。検出面から床面までの深さは22cmで、床面の標高は6.00mである。検出した床面積は58.19㎡を測る。

埋土 中央土坑の部分を除いて、3層にわたって堆積している。
上層から順に、1層が淡黒褐色シルト混じり極細砂、2層が暗黒褐色極細砂混じりシルトで炭や土器をやや多く含み、3層が黄褐色シルト混じり極細砂で、周壁溝には暗灰色シルト質極細砂ないし暗黒褐色極細砂質シルトが堆積している。

屋内施設 柱穴・周壁溝・中央土坑と土坑1基が検出された。

柱穴 合計17穴検出しているが、そのうち14穴は2本ずつ7組の対になっており、多少歪な形であるものの、7本柱の主柱穴が考えられる。P1とP8、P4とP11、P5とP12、P7とP14は切り合いにより前後関係が明らかであるが、P2とP9、P3とP10、P6とP13は不明であり、組み合わせは位置より推定したが、逆転している可能性がある。

P1は掘り方径40cm、柱径18cm、床面からの深さ34cm、P2は掘り方径38cm、柱径20cm、床面からの深さ40cm、P3は掘り方径42cm、柱径20cm、床面からの深さ45cm、P4は掘り方径46cm、柱径20cm、床面からの深さ34cm、P5は掘り方径46cm、柱径18cm、床面からの深さ50cm、P6は掘り方径40cm、柱径18cm、床面からの深さ40cm、P7は掘り方径42cm、柱径20cm、床面からの深さ43cm、P8は掘り方径40cm、柱径14cm、床面からの深さ38cm、P9は掘り方径42cm、柱径22cm、床面からの深さ15cm、P10は掘り方径44cm、柱径24cm、床面からの深さ56cm、P11は掘り方径51cm、柱径22cm、床面からの深さ35cm、P12は掘り方径45cm、柱径14cm、床面からの深さ26cm、P13は掘り方径43cm、柱径17cm、床面からの深さ13cm、P14は掘り方径46cm、柱径19cm、床面からの深さ10cmを測る。以上の14穴が主柱穴を構成しているものと考えているものである。

主柱穴以外にも3穴の柱穴が検出されている。P15はP13・P14の近くにあり、掘り方径49cm、柱径21cm、床面からの深さ24cmを測る。P16・P17は中央土坑Aの東西の両脇にあり、その方向は中央土坑Bと一致している。P16は掘り方径32cm、柱径12cm、床面からの深さ33cm、P17は掘り方径36cm、柱径18cm、床面からの深さ40cmを測る。

主柱間の距離はP6・P7間が最も広く3.1m、ついでP2・P3間が2.8mである。他はおおよそ2.4mで、もっとも短いP5・P6間で1.7mである。

周壁溝 周壁溝は全周している。床面での幅22~45cm、底の幅5~15cm、検出面からの深さ22~27cm、床面からの深さ2~6cmを測る。

中央土坑 土坑A・土坑Bの両方認められ、柱穴が東側と西側の2か所に認められる。

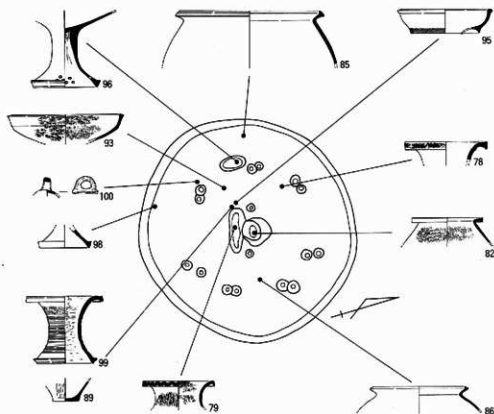
土坑A 土坑Bの南側に位置しており、平面形は細長い楕円形で、規模は長さ182cm、幅70cm、深さ12cmを測り、面積は1.1㎡である。長軸の方向はN72°Wである。埋土は2層に分かれ、上層は中央土坑Bと同じ覆土で、下層は黒色の砂質シルトであり、炭や土器、灰らしきものを含んでいる。

土坑B 平面形はほぼ円形で、規模は直径115~125cm、深さ30cmを測り、面積は1.4㎡である。埋土は2層に分かれ、上層が暗灰黄色の砂混じりシルトで、下層が黒褐色砂質シルトであり、炭や土器、灰らしきものを含んでいる。

この周辺から土器が集中して出土している。

中央土坑A・Bの面積は2.02㎡で、対床面積比は3.5%である。

土坑 主柱穴P8とP15の間にあり、規模は長さ1.08m、幅59cm、深さ10cmを測り、面積は0.6㎡である。埋土は1層で、黒褐色砂混じりシルトである。



第36図 SH01土器出土位置

- 出土遺物** 土器・石器が出土している（第36図）。
- 土器**
- 壺** 壺・甕・鉢・高坏・複合土器・器台他の各器種が出土している。
- 壺** 広口壺の口縁部（77～79）と体部（80）および底部片（81）からなる。
77～79はほぼ同タイプに分類される。ただし、77と79は口縁端部を下方に拡張するのに
対して、78は上下方向に拡張する。78の口縁端部に7条の、79の口縁端部に6条の櫛指波
状紋がそれぞれ描かれている。また、78は口頸部外面をナデ調整により仕上げ、内面には
わずかにハケ調整の痕跡が観察できる。77は、内外面とも磨滅のため観察できない。
80は体部上半に、上から2帯の櫛指波状紋、1帯の櫛指直線紋、1帯の櫛指波状紋の順
に描かれている。波状紋については9条、直線紋については7条を1帯としている。また、
頸部の上端部に突帯の痕跡がわずかに認められる。
底部片の81は、外面をヘラ磨きにより、内面をナデ調整により仕上げられている。
- 甕** 口縁部片（82～87）と底部片（88～89）が出土している。
口縁部については、法量的に、大型・中型・小型の3タイプが認められるが、基本形態
は同じである。また、調整法については、82の内外面のハケ調整痕を観察できる以外は、
磨滅のため観察できない。
底部の88については、外面をハケ調整、内面をヘラナデ調整により仕上げられている。
89については、外面をヘラ磨きにより仕上げられているが、形態的に甕形土器に分類した。
内面の調整は磨滅のため観察できない。
- 鉢** 90と91の2個体を図化した。いずれも有孔鉢に分類されるものである。
90は内外面とも指オサエにより仕上げられ、底部中央に径2.2cmの穿孔が認められる。
焼成前に穿孔されたものと考えられる。91についても、底部中央に径2.6cmの穿孔が認め
られる。当個体についても、焼成前に穿孔されている。ただし、この土器については甕に
分類される可能性も否定できない。
- 高坏** 坏部（92～94）と脚部（96～98）が出土している。
杯部については、調整痕を観察できたものについてはヘラ磨きにより仕上げられている。
93の体部内面以外は、すべて横方向に仕上げられている。
- 複合土器** 95の1個体である。口縁部のみ残存する。口縁端部と口縁部から体部への変換部の突帯
部をヨコナデ調整により仕上げられているが、他は磨滅のため観察できない。突帯外面に
は斜方向の刻み目が認められる。
- 器台** 99の1個体である。口縁部内外面をナデ調整、口縁部一体部上半底面をヘラ磨きにより
仕上げられている。
- 他** 100の釣手状の土器片が出土している。和泉の池上遺跡等で出土する釣鐘形の蜻蛉と考
えられる。
- 石器** S34～S42はサヌカイト製の石鏃である。S34・S36は平基式で、S37は凸基式、S38
～S41は有基式である。S34は幅1.5cm、長さ2.15cm、厚さ0.25cm、重さ0.9g。やや幅が
広く薄いタイプで、当遺跡では標準的な平基式である。S36は幅1.3cm、長さ2.7cm、厚さ
0.35cm、重さ0.8g。幅が狭く長いタイプである。S35は欠損のため元の形は不明である
が、五角形に近い他に例のないタイプである。S37は幅1.25cm、長さ3.4cm、重さ0.8g。

やや大きめで、厚さも0.5cmと厚い。S38-S41は幅が1.45-1.8cm、長さ3.25cm前後、厚さ0.45-0.7cm、重さ1.7-2.7g。やや広く厚手のタイプで、茎の部分の形状も似通った一群で、美乃利遺跡でもこの住居跡以外にこのタイプの有茎式はみとめられない。S42も欠損のため原形は不明であるが、かなり大型の有茎式の礎になるものと思われる。

S43は石楯の基部の破片と考えられる。幅2.75cm、残存長さ2.65cm、厚さ0.75cm、重さ4.5gである。

この住居跡からは実測図に挙げた以外にも多数のサヌカイトの剥片が出土しており、その総重量は340.6gに及ぶ。その一部9点を産地同定したところ、不明の1点を除き、全て金山東産との結果(第4章1節)を得ている。

時 期 出土遺物より弥生時代中期後半と考えられる。

SH02 (図版6-8 写真図版8・9・110)

検出状況 1区の中央部、やや西側で検出した(第35図)。SH03・SH04の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模 平面形は隅丸方形を呈する。北東辺と南東辺はほぼ直線的であるのに対して、北西辺と南西辺はわずかに弧を描いている。主柱穴を基準とした方位は $N40^{\circ}E$ である。

北西辺が4.5mを測るのに対して、他の3辺はいずれも4mを測る。検出面から床面までの深さは7cm-10cmと比較的浅く、床面における標高は6.26mである。床面積は20.28 m^2 である。

埋 土 褐色シルト質極細砂1層が堆積していた。当層のなかには炭が含まれていた。

屋内施設 柱穴・周壁溝・中央土坑を検出している。

柱 穴 4穴検出している。いずれも、掘り方の平面形は円形を呈する。

P1は掘り方径26cm、柱痕径14cm、床面からの深さ35cmを測る。P2は掘り方径30cm、柱痕径15cm、床面からの深さ54cmを測る。P3は掘り方径40cm、柱痕径22cm、床面からの深さ51cmを測る。P4は掘り方径32cm、柱痕径17cm、床面からの深さ47cmを測る。

柱穴間距離は、P1-P2間が2.57m、P2-P3間が2.25m、P3-P4間が2.20m、P4-P1間が2.15mと、各辺の規模同様P1-P2間を除いてほぼ一定している。

ところで、平面的な調査終了後、柱穴の断ち切りを行ったところ、P3とP4の柱痕内において、壺の一部が出土している。加えて、P3とP4から出土した土器は接合関係にある。つまり、同一個体の壺(101)を割り、柱を抜いた後に意識的に埋められたものと考えられる。

周壁溝 全周する。床面での幅10cm、底部幅4cmを測り、検出面からの深さは10-14cm、床面からの深さは7cmである。

中央土坑 4穴の主柱穴に囲まれたほぼ中央部に、土坑Aと土坑Bがセットで検出された。北東側に土坑Aが、南西側に土坑Bが位置する。

土坑A 平面形は溝状を呈し、主軸方向で1.40m、その直交方向で30cmを測る。断面形は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは8cmである。当土坑内からは、多量の炭が出土し、特に下層は炭層となっていた。またその下層は焼けていた(図版6)。

第2節 I区の調査

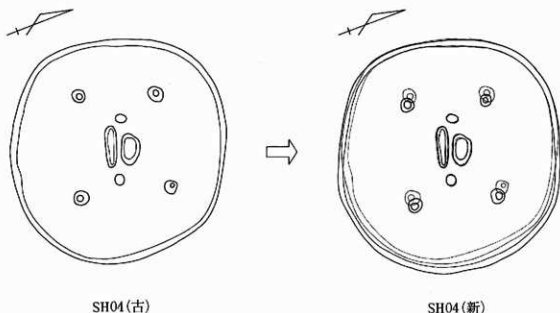
- 土坑B 平面形は円形を呈し、その径は70cmを測る。最深部における検出面からの深さは24cmである。炭をはじめとして、顕著な遺物は出土していない。
- 出土遺物 土器と土製紡錘車が出土している。
- 土器 壺・甕・高坏が出土している。
- 壺 広口壺(101)・無頸壺(102・103)・直口壺(104)が出土している。
- 広口壺 101は前述したようにP3・P4から出土し接合したものであるが、当住居跡埋土上面から出土した土器溜とも接合関係にある。体部は内外面ともハケ調整により仕上げられ、外面中位にはハケ調整後へう磨きが施されている。
- 無頸壺 102については、内外面とも磨滅のため調整は観察できない。103は、口縁部内外面をナデ調整により仕上げられ、体部外面にはわずかにへう磨き痕が認められる。
- 直口壺 104の1個体のみであるが、内面をナデ調整により仕上げられている。
- 甕 105の1個体が出土している。体部下半の一部を欠くが、ほぼ完形に復元できる。体部下半については、調整は観察できない。
- 高坏 脚部下半1個体(106)が出土している。内外面とも磨滅のため調整は観察できない。
- 土製紡錘車 甕の体部を転用したもの(107)で、打ち欠いて成形している。4.25cm×4.80cmと楕円形を指向する。厚さは5mmを測る。中央部には径5mmの穿孔が認められる。
- 時期 出土遺物から判断して、弥生時代中期後半と考えられる。

SH03 (図版9 写真図版10)

- 検出状況 I区中央部やや西側で検出した(第35図)。SH02の西側、SH05の南側に位置する。SH04とは平面的にはほぼ重複しており、当住居跡の埋没後SH04が建て替えられている。
- 形状・規模 平面形は隅丸方形を呈するが、全体的に円形を指向する。主柱穴を基準とした方位はN21°Eである。
- 一辺6.40mを測る。検出面(SH04の床面)から床面までの深さは15~20cmで、床面における標高は6.06mである。検出した床面積は29.7㎡である。
- 埋土 中央土坑を除いて黒褐色シルト泥じり極細砂1層からなる。
- 屋内施設 柱穴と土坑を検出した。
- 柱穴 4穴検出している。P1は掘り方径27cm、柱痕径13cm、床面からの深さ24cmを測る。P2は、掘り方径23cm、柱痕径11cm、床面からの深さ23cmを測る。P3は、掘り方径34cm、床面からの深さ36cmを測るが、柱痕は確認できなかった。P4は、掘り方径29cm、柱痕径13cm、床面からの深さ20cmを測る。
- 柱穴間の距離は、P1-P2間で3.03m、P2-P3間で4.16m、P3-P4間で3.00m、P4-P1間で4.40mを測る。
- 土坑 2基検出している。
- 土坑1 北東側周壁中央部の周壁溝に接した位置にある。平面形はほぼ円形を呈し、主軸方向で61cm、その直交方向で58cmを測る。断面形は緩やかなU字形を呈し、最深部における床面からの深さは24cmである。
- 埋土は2層からなり、下から暗黒褐色細砂質シルト・黒褐色シルト泥じり細砂の順に堆

積していた。いずれも人為的に埋められたものと考えられる。

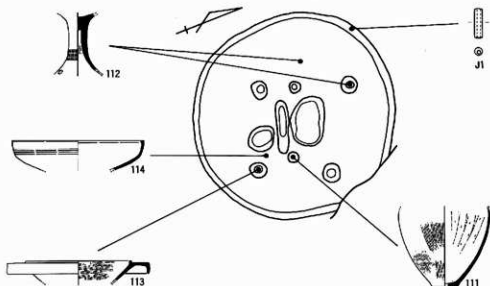
- 土坑 2** P 3の北約60cmに位置する。平面形はやや歪んでいるが、楕円形を指向する。主軸方向で80cm、その直交方向で52cmを測る。断面形は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは10cmである。埋土は、黄褐色シルト混じり細砂1層からなる。
- 出土遺物** 土器のみが出土している。高坏の口縁部片1点(109)が埋土中から出土している。内外面ともていねいなヘラ磨きにより仕上げられている。
- 時期** SH04との切り合い関係、および出土土器から判断して弥生時代中期と考えられる。
- SH04 (図版9-11 写真11・12・175)
- 検出状況** SH03と平面的に同じ位置で、若干拡張する形で建て替えられた住居跡である。さらに、周壁溝の切り合いおよび柱穴の切り合いから、当住居跡についても建て替えが行われ、西側へわずかに拡張している(第37図)。建替え前をSH04(古)、建替え後をSH04(新)と呼称する。
- 形状・規模** SH04(古)・SH04(新)ともに隅丸方形を呈するが、西辺については直線的な傾向は認められず、円形を指向する。主柱穴を基準とした方位は、N67°Wを指向する。
- SH04(古)は、東西方向及びその直交方向とも7mを測る。これに対してSH04(新)は、南北方向は同じであるが、東西方向の規模が7.30mと30cm西側に大きくなる。検出面から床面までの深さは、(古)・(新)とも6cmを測り、床面における標高は6.20mである。検出した床面積は、SH04(古)で43.7㎡、SH04(新)で47.6㎡を測る。
- 埋土** 中央土坑を除き、暗褐色砂混じりシルト1層が堆積していた。
- 屋内施設** 柱穴・中央土坑・周壁溝を検出した。中央土坑およびその東側・西側の柱穴と周壁溝の一部は両住居跡に共通する。
- 柱穴** SH04(古)はP1・P2・P3・P4からなり、SH04(新)はP5・P6・P7・P8からなる。いずれもSH04(新)の柱穴がSH04(古)の柱穴を西側へ平行移動する形で掘り直されている。
- (古) P1は、掘り方径35cm、柱径13cm、床面からの深さ34cmを測る。P2は、掘り方径44cm、柱径20cm、床面からの深さ37cmを測る。P3は、掘り方径42cm、柱径22cm、床面からの深さ30cmを測る。P4は、掘り方径42cm、柱径22cm、床面からの深さ30cmを測る。P1-P2間の距離は3.0m、P2-P3の間の距離は2.7m、P3-P4の間の距離は3.2m、P4-P1の間の距離は2.7mを測る。
- (新) P5は掘り方径48cm、柱径21cm、床面からの深さ22cmを測る。P6は掘り方径33cm、柱径16cm、床面からの深さ28cmを測る。P7は掘り方径46cm、柱径20cm、床面からの深さ24cmを測る。P8は掘り方径41cm、柱径18cm、床面からの深さ29cmを測る。
- P5-P6間の距離は2.9m、P6-P7の間は3.0m、P7-P8の間は3.2m、P8-P5の間は2.5mを測り、両住居跡の柱穴間距離はほぼ同じである。
- 他** P9とP10は中央土坑の西側と東側に位置する。2基の中央土坑の中間部の主軸とP9・P10を結ぶ線は一致する。P9は、掘り方径35cm、柱径13cm、床面からの深さ5cmを測る。P10は、掘り方径35cm、床面からの深さ5cmを測る。



第37回 SH04の建て替え

- 周壁溝** SH04(古)に伴う周壁溝は、東側を中心にSH04(新)に伴う周壁溝に切られているため、全体を復元することはできない。床面における幅15cmを測り、床面からの深さは3cm、住居跡検出面からの深さは9cmである。
- SH04(新)に伴う周壁溝は全周する。床面における幅20cmを測り、床面からの深さは3cm、住居跡検出面からの深さは9cmである。
- 中央土坑** SH04(古)・SH04(新)に共通する。それぞれの4穴の支柱穴に囲まれたほぼ中央部に、土坑Aと土坑Bがセットで検出された。北側に土坑Aが、南側に土坑Bが位置する。両土坑を合わせた面積は0.83㎡で、床面積に対する比は2.1%である。
- 土坑A** 平面形は溝状を呈し、主軸方向で1.28m、その直交方向で30cmを測る。断面形は皿形に近い逆台形を呈し、最深部における床面からの深さは10cmである。埋土は黒褐色砂混じりシルト1層からなり、炭がわずかに含まれていた。脚部の小片が出土している。
- 土坑B** 平面形は楕円形を指向する。主軸方向で1.20m、その直交方向で60cmを測る。断面形は逆台形を呈し、最深部における検出面からの深さは23cmを測る。埋土は2層からなるが、下層にやや多くの炭が含まれていた。甕の口縁部(108)が出土している。
- 出土遺物** 土器と石器が出土している。土器・石器とも、床面を検出した時点で建て替えの存在が明らかとなったため、SH04(古)・SH04(新)のどちらに伴うのかについては明らかにできなかった。
- 土器** 図化できたのは108の甕のみである。108は、口縁部内外面をナゲ調整、体部内面をハケ調整により仕上げられているが、体部外面については観察できない。
- 他に、埋土中より、直口壺の口縁部・無頸壺の口縁部・飯笥など出土している。
- 石器** S44は柱状片刃石斧である。長さ20cm、幅4.8cm、厚さ2.9cm、重さ592.9g。大型で丁寧に研磨されているが、一方の側面は剥離したままの状況で、そのまま使用していたものらしい。先端に敲打痕がみられる。石材は緑色片岩である。
- 時期** SH03との切り合い関係および出土遺物から判断して、弥生時代中期後半と考えられる。

- SH05 (図版12・13 巻首図版13 写真図版13-15・110・111)
- 検出状況** SH03・SH04の北側に位置する(第35図)。SD04に切られている以外は、他の遺構との切り合い関係は認められない。一部が調査区外までかかる以外はほぼ完存する。
- 形状・規模** 平面形は円形を呈するが、全体的に歪んでおり、南北方向に若干広がっている。主柱穴を基準とした方位はN70°Wである。
径5.4mを測り、検出面からの深さは5cmで、床面の標高は6.40mである。検出した床面の面積は20.6㎡である。
- 埋土** 灰黄褐色シルト質極細砂1層が堆積していた。
- 屋内施設** 柱穴・中央土坑・土坑1・周壁溝を検出した。
- 柱穴** 6穴検出したが、主柱穴になるのは4穴である。
- 主柱穴** P1は、掘り方径43cm、柱径径16cm、床面からの深さ36cmを測る。P2は、掘り方径39cm、柱径径18cm、床面からの深さ21cmを測る。P3は、掘り方径39cm、柱径径17cm、床面からの深さ57cmを測る。P4は、掘り方径43cm、柱径径20cm、床面からの深さ57cmを測る。柱穴間の距離は、P1-P2間で2.36m、P2-P3間で1.94m、P3-P4間で2.10m、P4-P1間で2.30mを測る。
- P1 なお、各柱穴を断ち割ったところ、P1においては、掘り方底部で柱痕の周囲を石で囲む様子を確認することができた。さらに、柱痕内からは、柱の抜き取り後に落ち込んだと考えられる高坏の脚(112)を確認した。
- P3 また、P3においては、柱痕の底部に高坏の口縁部(113)を逆にして入れている様子を確認することができた。おそらく柱を建てる前に入れたものと考えられ、当時の地鎮祭的なものの存在を示す例となるものと考えられる。
- 他の柱穴** P5は、掘り方径30cm、柱径径15cm、床面からの深さ10cmを測る。P6は、掘り方径32cm、柱径径16cm、床面からの深さ12cmを測る。P5とP6は、両柱穴の中間に中央土坑があり、中央土坑を構成する2基の土坑の接線の延長上に位置する。
なお、P6から甕の体部片(111)が出土している。
- 中央土坑** 4穴の主柱穴に囲まれた範囲に、土坑Aと土坑Bとがセットで検出された。南西側に土坑Aが、北東側に土坑Bが位置する。なお、両土坑を合わせた面積は1.35㎡で、当住居跡の床面積に占める割合は6.6%である。
- 土坑A** 平面形は溝状を呈する。長軸方向で1.38m、その直交方向で32cmを測る。横断面は逆台形を呈し、最深部における床面からの深さは10cmを測る。埋土は暗褐色シルト質極細砂1層からなり、炭が比較的多く含まれていた。
- 土坑B** 平面形は楕円形を呈する。長軸方向で1.30m、その直交方向で90cmを測る。横断面は2段に落ち込み、上段は逆台形、下段はU字形を呈する。最深部における床面からの深さは26cmを測る。
埋土は4層からなるが、土坑Aのように炭を多く含む層は認められない。
- 土坑1** 土坑Aの南西、P3とP4を結ぶライン上に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸方向で80cm、その直交方向で65cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における床面からの深さは5cmである。埋土は1層からなり、灰色シルト質極細砂である。



第38図 SH05遺物出土位置

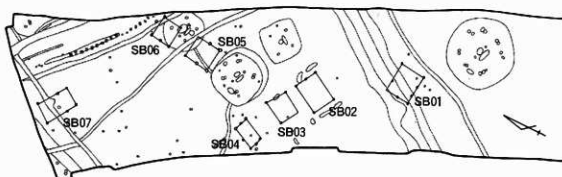
- 周壁溝** 検出した範囲では全周する。床面における幅は5～8cmを測り、床面からの深さは4cm、検出面からの深さは7cmである。
- 出土遺物** 土器と管玉（J1）が出土している（第38図）。
- 土器** 甕と高坏が出土している。
- 甕** 口縁部（110）と体部（111）が出土している。110は大型甕に分類されるもので、頸部に突帯を貼り付け、その上にノ字状の刻み目を施している。111は、体部内面を縦方向（下→上）のヘラ削りにより仕上げられている。
- 高坏** 口縁部（113・114）と脚部（112）が出土している。113は、体部を内外面ともヘラ磨きにより、口縁部を内外面ともヨコナデ調整により仕上げられている。114は内外面ともナデ調整により仕上げられている。112は、脚部に7条の凹線が施されている。
- 管玉** 碧玉製である。長さ1.5cm、直径4mm。両面穿孔と思われる。色調は灰緑色である。
- 時期** 出土遺物から判断して、弥生時代中期後半と考えられる。

SH06（図版14 写真図版15・176）

- 検出状況** I区の北端で検出している（第35図）。SD09・SD11・SD10によって切られている。遺構の残存状況は1/2程度である。
- 平面形は円形を呈する。規模は径6.3m以上である。検出面から床面までの深さは15cmで、床面の標高は6.32mである。
- 検出した床面積は10.7㎡を測り、本来の面積は約30㎡と復元される。
- 埋土** 黒褐色極細砂1層からなり、下位にはぶい黄褐色シルト質極細砂のブロックを含んでいる。
- 屋内施設** 柱穴が検出されただけである。
- 柱穴** 合計2穴検出しているが、部分的な調査のため主柱穴は不明である。P1は掘り方径32cm、柱痕径14cm、床面からの深さ47cmを測る。P2は掘り方径27cm、柱痕径12cm、床面からの深さ42cmを測る。本来は4穴で主柱穴をなしていたものと考えられる。

- 周壁溝** 周壁溝は検出された部分では全周している。床面での幅6cm、底部での幅3cm、検出面からの深さ18cm、床面からの深さ4cmを測る。
- 出土遺物** 土器・管玉・石器が出土している。
- 土 器** 甕 (115) と蛸壺 (116) が出土している。115は、口縁部内外面および体部内面をヨコナデ調整により、体部外面をハケ調整により仕上げている。116は、内外面とも指オサエとナデ調整により仕上げられている。
- 玉** J2は碧玉製の管玉である。長さ1.45cm、直径0.40～0.35cmと若干歪な形である。色調は緑灰色である。
- 石 器** S45・S46はサヌカイト製の石鏃である。S45は有基式で、長さ4.6cm、幅1.45cm、厚さ0.75cm、重さ4.1g。かなり厚手のタイプである。また、有基式とはいえ基と体部の境界が不明瞭なタイプである。
- S46は凸基式で、長さ2.85cm、幅1.15cm、厚さ0.55cm、重さ1.6g。体部中央に二次加工後研磨を施している。
- 時 期** 出土土器から判断して、弥生時代中期後半と考えられる。

II. 掘立柱建物跡



第39図 I区第2面 掘立柱建物跡

SB01 (図版14)

- 検出状況** 調査区中央部やや南側で検出した(第39図)。SB01の北西に位置し、SB01と平面的に重複しているが、当遺構との前後関係は明確にできない。
- 形状・規模** N7°Wに棟軸方向をとる、梁行1間、桁行2間の掘立柱建物であるが、北東隅の柱穴を検出することはできなかった。梁行方向で3.20m、桁行方向で3.65mを測り、当建物の面積は11.60㎡である。西桁行方向における柱穴間の平均距離は1.82mである。
- 柱 穴** 掘り方の平面形は円形を呈し、掘り方の径34～42cm、柱直径13～21cm、検出面からの深さ25～36cmを測る。
- 出土遺物** 全く出土していない。
- 時 期** 後述するSB02と建物の規模・柱穴の規模・埋土が同じことから、弥生時代中期後半と考えられる。

第2節 I区の調査

SB02 (図版15)

- 検出状況** 調査区中央部やや北側で検出した(第39図)。SH02の南西側、SD03の北側にあたり、南側をSK01・SK02、北側をSK05・SK06によって囲まれている。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** N59°Wに棟軸方向をとる、梁行1間、桁行3間の掘立柱建物であるが、西隅および南西桁行の柱を検出することはできなかった。梁行方向で4.30m、桁行方向で4.65mを測り、建物の面積は19.9㎡である。北東桁行方向の柱穴間の平均距離は1.55mである。
- 柱穴** 掘り方の平面形は円形を呈し、掘り方の径19～24cm、柱径10～15cm、検出面からの深さ23～30cmを測る。
- 出土遺物** 全く出土していない。
- 時期** 出土遺物から直接時期を特定することは困難である。しかし、木建物の周囲にあるSK01・SK02・SK05・SK06が、当建物となんらかの関係があるものと考えられる。したがって、これらの土坑の時期、つまり弥生時代中期後半と考えられる。

SB03 (図版15)

- 検出状況** 調査区中央部やや北側で検出した(第39図)。SB02の北西側、SH03・SH04の南側に位置し、SB02とは棟軸方向をほぼ同じくする。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** N34°Eに棟軸方向をとる、梁行1間、桁行1間の掘立柱建物であるが、南隅の柱穴は検出できなかった。梁行方向で2.90m、梁行方向で3.25mを測り、建物の面積は9.42㎡である。
- 柱穴** 掘り方の平面形は円形を呈し、掘り方の径21～24cm、柱径12～14cm、検出面からの深さ25～27cmを測る。
- 出土遺物** 全く出土していない。
- 時期** SB02と棟軸方向を同じくすること等から判断して、弥生時代中期以降と考えられる。

SB04 (図版15)

- 検出状況** 調査区中央部やや北側で検出した(第39図)。SB03の北西側、SH03・SH04の南西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** N29°Eに棟軸方向をとる、梁行2間、桁行2間の掘立柱建物である。北梁行方向で2.02m、南梁行方向で1.80m、東桁行方向で3.36m、西桁行方向で3.18mを測る。柱穴間の平均距離は、北梁行方向で1.01m、南梁行方向で0.90m、東桁行方向で1.68m、西桁行方向で1.59mを測る。建物の面積は6.79㎡である。
- 柱穴** 掘り方の平面形は円形を呈し、掘り方の径19～32cm、柱径10～16cm、検出面からの深さ21～31cmを測る。
- 出土遺物** 全く出土していない。
- 時期** 当建物についても、SB03と棟軸方向がほぼ同じであることから、SB03と同じ時期、弥生時代中期後半と考えられる。

SB05 (図版16)

- 検出状況** 調査区中央部やや北側で検出した(第39図)。SB06の南側、SH03・SH04の北側に位置する。SD04・SD05と切り合い関係にあり、SD04に切られている。
- 形状・規模** N8°Wに棟軸方向をとる、梁行1間、桁行2間の掘立柱建物であるが、北東隅の柱穴はSD04に切れ、検出できなかった。南梁行方向で3.18m、東梁行方向で3.68mを測る。桁行方向における柱穴間の平均距離は1.84mである。建物の面積は6.86㎡である。
- 柱穴** 掘り方の平面形は円形を呈し、掘り方の径35~43cm、柱痕径15~20cm、検出面からの深さ30~42cmを測る。
- 出土遺物** 全く出土していない。
- 時期** SB02~SB04と建物の規模、柱穴の規模・埋土が同じこと、およびSD04との切り合い関係から、弥生時代中期後半と考えられる。

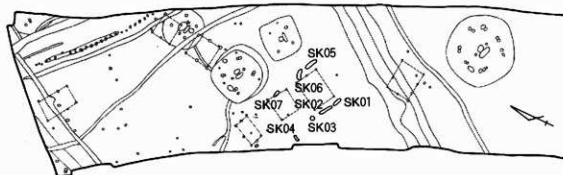
SB06 (図版16)

- 検出状況** 調査区中央部やや北側で検出した(第39図)。SB05の北側に位置し、SH05及びSD04と切り合い関係にある。SH05とは、当住居跡の床面を検出した段階で本建物の柱穴を確認したため、正確な切り合い関係は明確にできない。また、SD04との切り合い関係についても明確にできない。
- 形状・規模** N50°Wに棟軸方向をとる、梁行2間、桁行1間の掘立柱建物であるが、東梁行方向の中間部の柱穴については確認できなかった。西梁行方向で2.65m、東梁行方向で2.67mを測り、桁行方向は北側・南側ともに3.00mである。西梁行方向における柱穴間の平均距離は1.32mである。建物の面積は7.98㎡である。
- 柱穴** 掘り方の平面形は円形を呈し、掘り方の径25~31cm、柱痕径13~15cm、検出面からの深さ28~41cmを測る。
- 出土遺物** 土器の小片が出土しているが、時期は特定できない。
- 時期** SB05と棟軸方向・規模が同じことから、SB05と同じ時期と考えられる。

SB07 (図版16)

- 検出状況** 調査区北端部で検出した(第39図)。SD12と切り合い関係にあるが、その前後関係は明確にできない。
- 形状・規模** N55°Wに棟軸方向をとる、梁行1間、桁行3間の掘立柱建物であるが、南西桁行方向において南西隅の北東側の柱穴は確認できなかった。南西梁行方向で2.92m、北東梁行方向で2.48mを測り、桁行方向はともに4.42mである。北東桁行方向における柱穴間の平均距離は1.47mである。建物の面積は12.5㎡である。
- 柱穴** 掘り方の平面形は円形を呈し、掘り方の径18~25cm、柱痕径9~16cm、検出面からの深さ23~32cmを測る。
- 出土遺物** 全く出土していない。
- 時期** SB01~SB06と建物の規模、柱穴の規模・埋土が同じことから、弥生時代中期後半と考えられる。

Ⅲ. 土 坑



第40図 I区第2面 土坑

SK01 (図版17)

検出状況 SK02の東側に位置する(第40図)。他の遺構との切り合い関係はない。SB02とは近接し、主軸方向をほぼ同じくすることから、両遺構間に関連があるものと考えられる。

形状・規模 平面形は長楕円形で、ほぼ東西方向に主軸をとる。主軸方向で1.40m、その直交方向で48cmを測る。横断面は皿形を呈し、最深部における検出面からの深さは5cmである。

埋没状況 灰黄褐色砂質シルト1層からなる。

出土遺物 甕の底部片が1点(119)出土している。内面には縦方向の弱いヘラ削りが、外面には縦方向のハケ目がわずかに観察される。

時期 出土遺物から判断して、弥生時代中期後半と考えられる。

SK02 (図版17 写真図版16)

検出状況 SK01の西・SK03の東側に位置する(第40図)。他の遺構との切り合いはなく、完存する。SB02とは近接し、主軸方向をほぼ同じくすることから、両遺構は何らかの関連があるものと考えられる。

形状・規模 平面形は長楕円形で、ほぼ東西方向に主軸をとる。主軸方向で1.98m、その直交方向で49cmを測る。横断面はU字形を呈し、最深部における検出面からの深さは15cmである。

埋没状況 黒褐色シルト質極細砂1層からなる。

出土遺物 甕の口縁部(117)と甕の底部(118)が各1個体出土している。

時期 出土遺物から判断して弥生時代中期後半と考えられる。

SK03 (図版17 写真図版16・111)

検出状況 SK02の西側に位置する(第40図)。他の遺構との切り合い関係はなく、完存する。

形状・規模 平面形は楕円形を呈し、長軸方向で68cm、その直交方向で52cmを測る。横断面はU字形を呈し、最深部における検出面からの深さは16cmである。

埋没状況 暗黒灰色シルト質極細砂1層からなる。

遺物出土状況 口縁部から底部付近まで残存する甕が、土坑底に横たえられた状態で出土している。この土器の主軸方向と当土坑の主軸方向とはほぼ一致する。この他、埋土中から同じく口縁部から底部付近まで残存する甕が出土している。

出土遺物 甕が2個体と高坏脚部が出土している。121は二次焼成を受けている。
時期 出土遺物から判断して弥生時代中期後半と考えられる。

SK04

検出状況 SB03の南側、SK03の西側に位置する(第40図)。
形状・規模 平面形は楕円形で、長軸方向で1.04m、その直交方向で31cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは5cmを測る。
埋没状況 暗褐色砂混じりシルト1層からなる。
出土遺物 全く出土していない。
時期 SK03と主軸方向がほぼ同じことから、弥生時代中期後半と考えられる。

SK05

検出状況 SB02の北側、SK06の東側に位置する(第40図)。
形状・規模 平面形は楕円形で、長軸方向で1.73m、その直交方向で48cmを測る。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは8cmを測る。長軸はN29.5°Eを指向する。
埋没状況 黒褐色シルト質極細砂1層からなる。
出土遺物 全く出土していない。
時期 SK01・SK02と主軸方向をほぼ同じくし、SB02を意識していることから、弥生時代中期後半と考えられる。

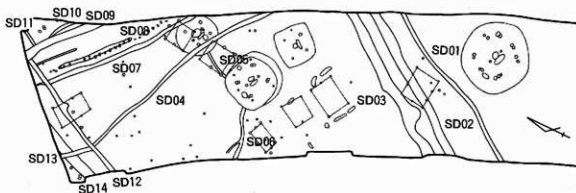
SK06

検出状況 SB02の北側、SK05の西側に位置する(第40図)。
形状・規模 平面形は不整形で、長軸方向で1.63m、その直交方向で58cmを測る。横断面はU字形をなし、最深部における検出面からの深さは10cmを測る。長軸はN80°Eを指向する。
埋没状況 黒褐色シルト質極細砂1層からなる。
遺物出土状況 土坑の肩の斜面に壺の肩部の小片がはりつくような状態で出土している。
出土遺物 壺の肩部の小片が出土している。ヘラ描沈線紋が2条残存する。小片のため図化できなかった。
時期 出土遺物から判断して弥生時代前期後半と考えられる。

SK07

検出状況 SB03の北梁行の柱穴間に位置する(第40図)。
形状・規模 平面形は楕円形で、長軸方向で1.11m、その直交方向で34cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは6cmを測る。
埋没状況 暗褐色極細砂質シルト1層からなる。
出土遺物 全く出土していない。
時期 SB03と主軸方向を同じくし、SB03に伴う遺構の可能性も高いことから、弥生時代中期後半と考えられる。

第2節 I区の調査



第41図 I区第2面 溝

IV. 溝

SD01 (写真図版17)

検出状況 I区中央部南側に位置する(第41図)。SD02の南東、SH01の西に位置するが、他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模 南西から北東へのびる溝で、両端とも調査区外までのびている。検出した長さは23.3mである。横断面はU字形を呈し、検出面における幅36~48cmを測り、最深部における検出面からの深さは23cmである。底部の標高は北東端で6.01m、南西端で6.04mである。

埋没状況 黒褐色砂混じりシルト1層からなり、自然に埋没したものと考えられる。

出土遺物 わずかに弥生土器片が出土している。

時期 出土遺物から判断して弥生時代と考えられるが、より細かな時期は特定できない。

SD02 (図版19 写真図版17)

検出状況 I区中央部(第41図)で調査区を斜めに横切るような形で検出された。

形状・規模 溝の方向は北東から南西である。検出した長さは20.98mである。幅は検出面で1.46~0.92m、溝底で72~25cmを測る。断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは42cmである。溝底の標高は北東端は5.93m、南西端は5.83mであり、北東方向から南西方向へ流れていると思われる。

埋没状況 埋土は3層に分けられ、上層から暗褐色灰色シルト混じり極細砂、暗褐色灰色シルト混じり極細砂(ラミナ)、黒褐色シルト質極細砂である。粒子からみて徐々に埋没していったものと思われる。

出土遺物 石器のみが出土している。

石器

S47は磨石である。長さ8.5cm、幅7.15cm、厚さ5.55cm、重さ491.7g。磨面は卵形で、ほぼ平坦で中央部にくぼみがある。磨面を下に置くと上面のふくらみはちょうど手のひらにおさまりやすい形状、大きさである。石材は細粒ハンレイ岩で、ややざらついた質感である。

時期 出土遺物・埋土等から時期を特定することは困難である。SD01とほぼ平行することから、弥生時代の可能性が高いものと考えられる。

SD03 (図版19 写真図版17)

- 検出状況** I区中央部で検出した(第41図)。SD02の北西側に位置し、この溝とはほぼ平行している。SB01と切り合い関係にあり、SB01の柱穴を切っている。
- 形状・規模** 南西から北東にはほぼ直線的にのびる溝で、両端とも調査区外までのびる。検出した長さは20.4mである。横断面は逆台形に近いU字形を呈し、検出面における幅は96cm～2.63mを測る。最深部における検出面からの深さは52cmを測り、底部における幅は23cm～1mを測る。底部における標高は、南西端で5.77m、北東端で5.87mである。
- 埋没状況** 3層からなり、下から暗黒褐色シルト質極細砂、暗褐色極細砂質シルト、暗褐色極細砂混じりシルトの順に堆積していた。層相から判断して、徐々に埋没していったものと考えられる。
- 出土遺物** 当溝内からは遺物は全く出土していない。
- 時期** SD02とはほぼ平行していることから、弥生時代の範囲で捉えられるものと考えられる。

SD04 (写真図版17)

- 検出状況** I区北部で検出した(第41図)。SH05を切り、SD12に切られている。またSB05とも切り合い関係にあるが、その前後関係を明確にすることはできない。
- 形状・規模** 北西から南東へのびる溝で、南東端は調査区外までのび、北西端はSD12に切られている。検出した長さは28.5mである。横断面は箱形に近い逆台形を呈し、検出面における幅は30～61cmである。最深部における検出面からの深さは23cmを測り、底部における幅は19～42cmである。底部の標高は、南東端で6.07m、北西端で6.19mである。
- 埋没状況** 3層からなり、下から暗褐色極細砂質シルト、暗褐色極細砂混じりシルト、黒色シルト混じり黒褐色シルト質砂の順に堆積しているが、特に最上層については人為的に埋められたものと考えられる。
- 出土遺物** 弥生土器片がわずかに出土しているが、器種等は特定できない。
- 時期** SH05との切り合い関係から、弥生時代中期後半～後期と考えられる。

SD05

- 検出状況** I区中央やや北側で検出した(第41図)。当溝の両端においてSH03・SH04及びSH05と切り合い関係にあり、いずれも切られている。また、SB05とも切り合い関係にあり、一つの柱穴に切られている。本来はSD06と同一の溝の可能性が高い。
- 形状・規模** 南西から北東へわずかに弧状をなしてのびる溝で、両端をSH03・SH04及びSH05に切られている。検出した長さは3.35mである。横断面は箱形を呈し、検出面における幅は16～30cmである。最深部における検出面からの深さは14cmを測り、底部における幅は9～16cmである。底部における標高は、南西端で6.21m、北東端で6.18mである。
- 埋没状況** 1層からなる。
- 出土遺物** 全く出土していない。
- 時期** SH03・SH04・SH05との切り合い関係より、弥生時代中期後半以前と考えられる。

第2節 I区の調査

SD06

- 検出状況** I区中央部やや北西側で検出した(第41図)。SD05の南西側に位置する。SH03・SH04と切り合い関係にあり、両遺構に切られている。
- 形状・規模** はほぼ東西方向にのびる溝で、東側をSH03・SH04に切れ、西側は調査区外までのびている。検出した長さは6.59mである。横断面はU字形をなし、検出面における幅は26～49cmである。最深部における検出面からの深さは28cmを測り、底部における幅は9～34cmである。底部の標高は東端で5.99m、西端で6.05mである。
- 埋没状況** 1層からなる。
- 出土遺物** 全く出土していない。
- 時期** SH03・SH04との切り合い関係より、弥生時代中期後半以前と考えられる。

SD07

- 検出状況** I区北隅を斜めに横切る形で検出された(第41図)。SD12に切られ、SH05を切っている。
- 形状・規模** 溝の方向は北西から南東である。長さは21.97mが検出された。幅は検出面で69～42cm、溝底で36～7cmを測る。断面はU字形を呈し、検出面からの深さは14cmである。溝底の標高は北西端は6.37m、南東端は6.33mであり、北西方向から南東方向へ流れていたものと思われる。
- 埋没状況** 灰黄褐色シルト質極細砂である。
- 出土遺物** 全く出土していない。
- 時期** SH05・SD12との切り合い関係から、弥生時代中期後半～奈良時代と考えられる。

SD08

- 検出状況** I区北隅付近で検出された(第41図)。連続する足跡状の列に切られている。SD07とはほぼ平行に流れている。
- 形状・規模** 溝の方向は北西から南東である。長さは10.49mが検出された。幅は検出面で60～32cm、溝底で30～15cmを測る。断面はU字形を呈し、検出面からの深さは4cmである。溝底の標高は北西端で6.42m、南東端で6.37mを測り、北西方向から南東方向へ流れていたものと思われる。
- 埋没状況** 灰黄褐色シルト質極細砂1層で、SD07とよく似ている。
- 出土遺物** 全く出土していない。
- 時期** 時期を判断する材料がなく、明確にできない。

SD09 (図版19 写真図版16・111)

- 検出状況** I区北隅を斜めに横切る形で検出された(第41図)。SD10・SD11・SD12を切っている。
- 形状・規模** 溝の方向は北西から南東である。長さは9.67mが検出された。幅は検出面で1.47～0.76m、溝底で86～32cmを測る。断面はU字形を呈し、検出面からの深さは32cmである。溝底の標高は北西端で6.14m、南東端で6.13mを測り、北西方向から南東方向へ流れてい

たものと思われる。

- 埋没状況** 埋土は4層で、底部に黒色シルトが溜まり、その上に2層のラミナがみとめられる。徐々に埋没していったものと思われる。
- 出土遺物** 飛鳥時代の須恵器の坏身・蓋や土師器の甕や高坏が出土している。
131は須恵器の坏Aである。口径14.5cm、器高3.15cm。灰白色で、外面に火だすきが見られる。底部は回転ヘラ切り後なでている。
133は土師器の甕である。口径15.7cm、残存高7.5cm、腹径14.8cm。胴があまり張らず口径が最大径になるタイプの小型の甕である。胴部外面に一部ハケメが残り、内面は板でなでていると思われる。色調は橙から黄褐色であり、ススなどの付着はみられない。
- 時期** 出土遺物から、飛鳥時代～奈良時代と考えられる。

SD10

- 検出状況** 調査区北東隅で検出した(第41図)。SH06を切り、SD09に切られている。
- 形状・規模** 北西から南東方向にはほぼ直線的にのびる溝である。北西側はSD09に切れ、南東側は調査区外までのびている。検出した長さは3.90mである。横断面はU字形を呈し、検出面における幅は21～34cmを測る。最深部における検出面からの深さは18cmを測る。底部の標高は、北西端で6.30m、南東端で6.40mである。
- 埋没状況** 人為的に埋め戻されたと考えられ、黒褐色シルトと灰色シルト混じり砂が混じり合った埋土からなる。
- 出土遺物** 全く出土していない。
- 時期** SH06およびSD09との切り合い関係より、弥生時代中期後半以降、7世紀後半以前と考えられる。

SD11 (図版19 写真図版111)

- 検出状況** 調査区北東隅で検出した(第41図)。SH06を切り、SD09に切られている。
- 形状・規模** 北東から南西方向にはほぼ直線的にのびる溝である。検出した長さは2.13mである。横断面はU字形をなし、検出面における幅は26～34cmである。最深部における検出面からの深さは20cmを測る。底部における標高は、北東端で6.32m、南西端で6.21mである。
- 埋没状況** 黒灰色～黒褐色シルト混じり灰色極細砂1層からなり、その層相から人為的に埋められたものと判断される。
- 出土遺物** 132は須恵器の坏Bである。口径14.8cm、器高3.7cm。灰白色で、外面の一部に自然釉がかかっている。砂粒を多く含み、形も歪んでいる。
- 時期** SD09との切り合い関係、出土遺物から判断して、7～8世紀代と判断される。

SD12

- 検出状況** 調査区北西部で検出した(第41図)。SD04・SD07・SD13を切り、SD09に切られている。このほか、SB07と平面的に重複するが、その前後関係は明確にできない。
- 形状・規模** 南西から北東へほぼ直線的にのびる溝で、南西端は調査区外までのび、北東端はSD09

第2節 I区の調査

に切られている。検出した長さは、18.4mである。横断面はU字形を呈し、検出面における幅は41～86cmを測る。最深部における検出面からの深さは26cmを測る。底部の標高は北東端で6.16m、南西端で6.01mである。

埋没状況 2層からなり、下から黒褐色極細砂混じりシルト、黒灰色極細砂質シルトが堆積している。下層は人為的な埋め戻しによるもので、上層は自然堆積により埋没している。

出土遺物 わずかに弥生土器の小片が出土している。

時期 後述するように、弥生時代後期のSD14を切るSD13を切り、さらに7～8世紀代のSD09に切られていることから、弥生時代後期から7世紀にかけての時期と考えられる。

SD13

検出状況 調査区北西部で検出した（第41図）。SD14を切り、SD12に切られている。

形状・規模 北西から南東方向へほぼ直線的にのびる溝である。北西端はⅡ区へのび、南東端はSD12に切られている。検出した長さは4.05mである。横断面はU字形をなし、検出面における幅は49～58cmを測る。最深部における検出面からの深さは20cmを測る。底部の標高は北西端で6.24m、南東端で6.18mである。

埋没状況 2層からなり、下から黒灰色シルト混じり極細砂、黒褐色極細砂混じりシルトが堆積している。下層については自然堆積によるものと判断されるが、上層については人為的に埋め戻されたようである。

出土遺物 全く出土していない。

時期 SD12・SD14との切り合い関係から、弥生時代後期から7世紀にかけてと考えられる。

SD14（図版19 写真図版26）

検出状況 調査区北西部で検出した（第41図）。SD13に切られている。

形状・規模 南西から北東方向へほぼ直線的にのびる溝である。南西端は調査区外までのび、北東端はⅡ区へのびている。検出した長さは6.91mである。横断面はU字形をなし、検出面における幅は1.14m～1.86mを測る。最深部における検出面からの深さは74cmを測る。底部における標高は、南西端で5.90m、北東端で5.94mである。

埋没状況 6層からなる。4～6層の堆積による埋没後、再び掘り返され、再度1～3層が堆積している。4～6層は自然堆積と考えられるが、1～3層は人為的に埋め戻されたものと判断される。

出土状況 再掘削後の埋没過程で弥生時代後期の壺が出土している。

出土遺物 上記の再掘削の埋没に伴う過程で出土した壺が出土したのみである。当初の埋没過程の層からは全く出土していない。

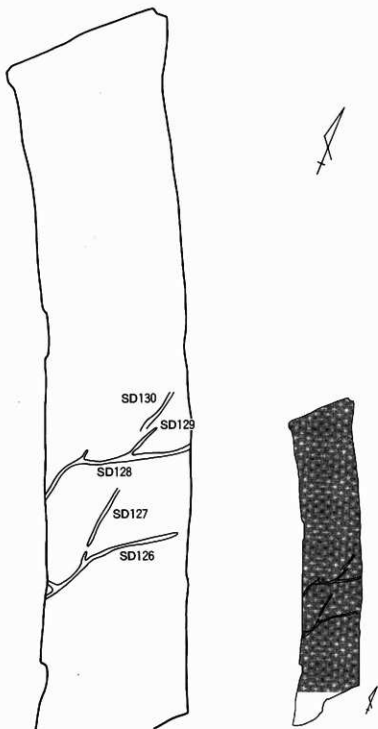
時期 弥生時代後期の段階で再掘削されているが、当初の掘削時期は特定できない。

4. 第3面(1)面の調査

(1) 概要 (図版20 写真図版18)

概要

I区では土壌層Ⅱの上面において、水田畦畔を切る形で溝SD126～SD130の5本の溝を検出した。これらの溝から出土している遺物が小片ながら弥生時代前期末のものである。層位的にみて第2面で検出された最古の遺構より古いものであり、上層の遺構の掘り残しではなく、下位の面にあたるものと考え、これを第3面(1)の遺構と認識している。これらの溝群は、I区の中央よりやや南よりに集中している。



第42図 I区第3面(1)

第2節 I区の調査

(2) 調査の結果

SD126 (図版21)

- 検出状況** I区中央部やや南側に位置する(第42図)。南西部で二股状の分岐が認められる。また、当溝のほぼ中間部から北側にわずかに溝状の張り出しが認められる。これは、その北側のSD127に続くものと考えられるが、当溝との切り合い関係は明確にできない。他の遺構との切り合い関係も認められない。
- 形状・規模** 北西から南西方向にわずかに弧状を呈する溝である。北東端は調査区内で収束し、南西端は調査区外までのびている。検出した長さは24.5mである。横断面は皿形を呈し、検出面における幅は24~34cmを測る。最深部における検出面からの深さは10cmである。底部の標高は、北東端で6.11m、南西端で6.00mを測る。
- 埋没状況** 暗灰色シルト1層からなる。
- 出土状況** 溝底から甕の口縁部が出土している。
- 出土遺物** 甕(134)と底部片(135)が出土している。134は、体部上半に5条からなるヘラ描沈線が2帯描かれている。135は、甕か甕の底部と考えられるが、特定できない。
- 時期** 出土遺物から判断して、弥生時代前期と考えられる。

SD127

- 検出状況** I区中央やや南側に位置し(第42図)、SD126の北側にあたる。SD126中間部に認められるわずかな分岐の延長上にあたる。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** ほぼ南北方向に直線的な溝で、両端とも調査区内で収束している。検出した長さは8.4mである。横断面は皿形をなし、検出面における幅は31cm~44cmを測る。最深部における検出面からの深さは15cmを測る。底部における標高は、北端で6.01m、南端で6.03mを測る。
- 埋没状況** 暗灰色シルト1層からなる。
- 出土遺物** 全く出土していない。
- 時期** 溝の規模・埋土がSD126と類似することから、弥生時代前期と考えられる。

SD128 (図版21)

- 検出状況** 調査区中央部に位置する(第42図)。当溝のほぼ中間部でSD129と分岐するが、当溝との前後関係は明確にできない。また、他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 東北東-西南西方向にはほぼ直線的な溝で、西側で北東-南西方向に屈曲している。両端とも調査区外までのびている。屈曲部付近で北側へ分岐する溝がわずかに認められる。検出した長さは21.3mである。横断面は皿形を呈し、検出面における幅は42~65cmを測る。最深部における検出面からの深さは17cmを測る。底部の標高は、東北東端で6.08m、西南西端で6.01mである。
- 埋没状況** 暗灰色シルト1層からなる。
- 出土遺物** 全く出土していない。
- 時期** 溝の規模・埋土がSD126と類似することから、弥生時代前期と考えられる。

SD129

- 検出状況** SD130の南側に位置する(第42図)。SD128から分岐する溝であるが、当溝との前後関係は明確にできない。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 南北方向にほぼ直線的な溝で、南端はSD128にとりつき、北端は調査区内で収束している。検出した長さは5mである。横断面は皿形を呈し、検出面における幅は24~33cmを測る。最深部における検出面からの深さは8cmを測る。底部の標高は、北端で6.18m、南端で6.16mを測る。
- 埋没状況** 暗灰色シルト1層からなる。
- 出土遺物** 全く出土していない。
- 時期** 溝の規模・埋土がSD126と類似することから、弥生時代前期と考えられる。

SD130

- 検出状況** SD129の北側に位置する(第42図)。他の遺構との切り合い関係は認められない。
- 形状・規模** 南北方向にほぼ直線的な溝で、両端とも調査区内で収束している。検出した長さは6.3mである。横断面は皿形を呈し、検出面における幅は34~39cmを測る。最深部における検出面からの深さは12cmを測る。底部の標高は、北端で6.06m、南端で6.08mである。
- 埋没状況** 暗灰色シルト1層からなる。
- 出土遺物** 全く出土していない。
- 時期** 溝の規模・埋土がSD126と類似することから、弥生時代前期と考えられる。

5. 第3面(2)面の調査

(1) 概要 (図版22 写真図版18)

概要 I区第3面(1)の溝を検出したのはほぼおなじレベルで水田畦畔を検出した。この面については第3面(2)としている。

(2) 調査の結果 (写真図版19)

水田跡 第3面はほぼ全域で水田跡を検出した。計147区画を検出した。その面積は2,067㎡に及ぶ。

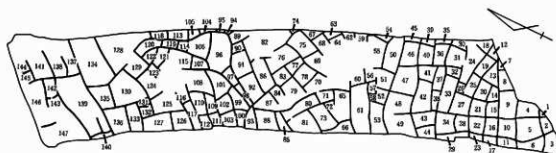
畦畔 基本的には同規模の幅で、大畦畔・小畦畔の区別はない。断面は台形を呈し、畦の幅は検出面で10～15cm、水田面で20～30cmを測る。水田面との比高は5～10cmである。

平面形 水田の区画は長方形ないし台形をなす。

面積 一区画の広さは一定しておらず、最も狭い区画で0.4㎡、最も広い区画で28.9㎡を測る。ただし、調査区外までのびる区画には40㎡を越えるものも認められる。平均の区画面積は8.95㎡である。

標高 水田面の標高は南側ほど低くなる傾向がある。もっとも高い水田で6.29m、最も低い水田で5.81mと、48cmの比高差がある。

なお、各水田区画の詳細については、次の第1表・第2表を参照されたい。



第43図 I区第3面(2) 水田跡

第1表 I区第3面(2) 水田跡一覧表(1)

()内は検出面積

No.	標高(m)	面積(㎡)	No.	標高(m)	面積(㎡)	No.	標高(m)	面積(㎡)
1	5.82	(0.8)	12	5.88	(3.3)	23	5.86	(2.1)
2	5.83	(4.8)	13	5.87	5.2	24	5.89	
3	5.86	(8.4)	14	5.85	3.7	25	5.88	6.0
4	5.84	(9.3)	15	5.87	5.1	26	5.92	2.1
5	5.86	15.2	16	5.89	6.4	27	5.89	10.9
6	5.81	(8.4)	17	5.88	(3.2)	28	5.91	6.5
7	5.87	(1.2)	18	5.88		29	5.99	(3.9)
8	5.89	(6.4)	19	5.87	6.0	30	5.92	(3.7)
9	5.88	(13.5)	20	5.88	6.7	31	5.89	9.6
10	5.89	8.4	21	5.92	7.4	32	5.88	3.3
11	5.84	(4.2)	22	5.94	7.7	33	5.91	12.8

第2表 I区第3面2) 水田跡一覧表(2)

No.	標高(m)	面積(m ²)	No.	標高(m)	面積(m ²)	No.	標高(m)	面積(m ²)
34	5.98	10.4	72	6.06	(2.0)	110	6.13	8.3
35	5.95	(3.6)	73	6.04	12.4	111	6.13	(4.0)
36	5.94	8.3	74	6.09	0.4	112	6.13	(5.2)
37	5.93	6.1	75	6.05	13.7	113	6.19	(6.0)
38	5.94	2.8	76	6.09	17.6	114	6.16	2.4
39	5.99	(2.9)	77	6.07	4.8	115	6.17	12.4
40	5.98	8.9	78	6.08	10.0	116	6.14	17.6
41	5.90	6.8	79	6.10	13.2	117	6.13	(6.6)
42	5.95	14.1	80	6.05	12.8	118	6.24	(4.4)
43	5.94	8.0	81	6.04	(13.4)	119	6.18	4.0
44	5.97	(6.0)	82	6.06		120	6.20	6.0
45	6.03	(2.6)	83	6.05	5.9	121	6.15	5.3
46	5.99	11.7	84	6.07	6.8	122	6.18	4.4
47	5.96	18.0	85	6.02	(4.0)	123	6.19	6.0
48	5.93	14.1	86	6.08	13.3	124	6.19	12.2
49	5.93	(18.5)	87	6.06	8.2	125	6.14	16.4
50	6.04	(16.1)	88	6.04	(11.3)	126	6.14	(12.3)
51	5.98	10.3	89	6.12		127	6.16	(16.2)
52	6.14	5.2	90	6.13	2.5	128	5.64	(40.0)
53	6.02	(12.8)	91	6.11	13.3	129	6.22	10.0
54	6.04	(2.0)	92	6.10	12.4	130	6.25	28.9
55	6.03	12.9	93	6.09	(5.4)	131	6.19	2.0
56	6.04		94	6.15	(0.4)	132	6.14	3.5
57	5.99	2.7	95	6.18	(0.4)	133	6.18	(9.9)
58	6.00	1.6	96	6.12	25.0	134	6.29	(44.8)
59			97	6.11	4.0	135	6.22	10.4
60	6.03		98	6.09	2.1	136	6.19	(20.0)
61	6.01	(26.8)	99	6.12	7.5	137	6.28	
62	6.05		100	6.08	(4.0)	138	6.26	
63	6.08	(2.8)	101	6.12	11.2	139	6.21	50.8
64	6.10		102	6.14	7.3	140	6.21	(3.2)
65	6.06	16.0	103	6.11	(5.5)	141	6.29	
66	6.06	(6.9)	104	6.19	(1.6)	142	6.26	2.0
67	6.13	(2.4)	105	6.18	(3.4)	143	6.19	
68	6.11		106	6.15	16.4	144	6.29	
69	6.06		107	6.16	5.5	145	6.31	
70	6.05	12.0	108	6.13	19.2	146	6.14	
71	6.07	4.0	109	6.14	4.1	147	6.22	

6. 第4面の調査

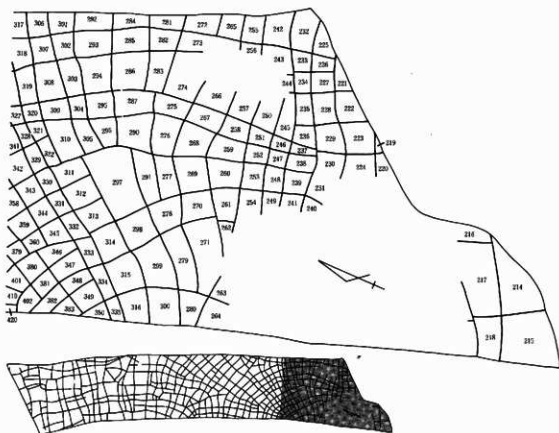
(1) 調査の概要 (図版23 写真図版20)

当地区全域に及ぶ水田跡を検出した。計452区画を検出した。

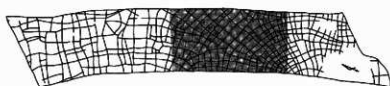
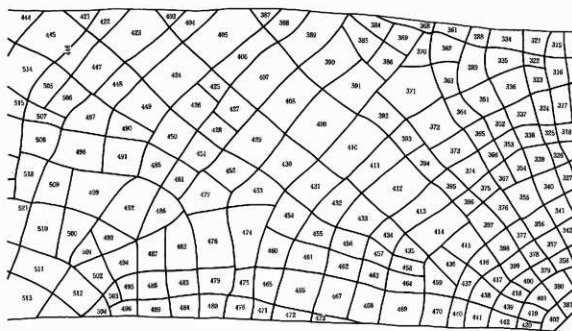
(2) 調査の結果 (写真図版20・21)

- 水田跡** 当面全域で水田跡を検出した。当地区の調査面積が2,067㎡であることから、2,000㎡強におよぶ水田跡を検出したことになる。
- 畦 畔** 検出した範囲では基本的には同規模で、いわゆる大畦畔・小畦畔の区別は認められない。断面形は漕鉢形をなし、茶底部における幅20cm、水田面との比高差10cmを測る。
- 平面形** 基本的には方形を指向した、いわゆる小区画水田に分類されるものである。しかし、弧状にのびる畦畔に対して、その弧に対して放射方向に直線的にのびる畦畔が交わっている。したがって、厳密には方形というより台形を呈するものが多く認められる。
- 面積** 各区画の面積は一定ではなく、狭い区画で0.2㎡、広い区画で10.4㎡と、かなりのバリエーションが認められる。
- 標高** 水田面の標高は、第2節における土層断面の観察結果同様、南側ほど低くなる傾向が認められる。最も高い水田面の標高で5.87m、最も低い水田面の標高で5.45mと、42cmの比高差が認められる。

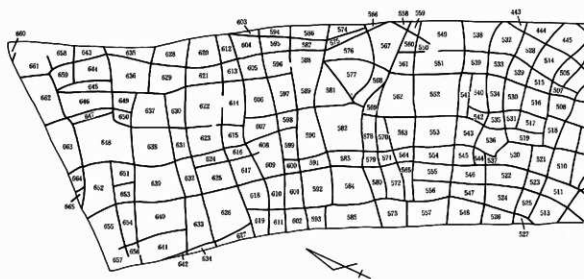
なお、各水田区画の詳細については、第3表～第6表を参照されたい。



第44図 I区第4面 水田跡 (1)



第45図 I区第4面 水田跡(2)



第46図 I区第4面 水田跡(3)

第3表 I区第4面 水田跡一覧表(1)

()内は検出面積

No.	標高(m)	面積(m ²)	No.	標高(m)	面積(m ²)	No.	標高(m)	面積(m ²)
214	5.56	(5.4)	252	5.50	0.8	290	5.51	1.9
215	5.51	(7.8)	253	5.51	1.0	291	5.51	1.5
216	5.55	(1.2)	254	5.50	(1.8)	292	5.57	(1.3)
217	5.54	6.6	255	5.52	(1.1)	293	5.58	1.5
218	5.51	(2.2)	256	5.55		294	5.54	2.0
219	5.50	(1.2)	257	5.50	(1.4)	295	5.51	1.1
220	5.48	(0.8)	258	5.52	0.9	296	5.54	0.8
221	5.53	(0.3)	259	5.52	1.5	297	5.51	6.3
222	5.53	(1.8)	260	5.51	1.7	298	5.52	2.2
223	5.50	1.9	261	5.50	1.8	299	5.51	3.1
224	5.51		262	5.46		300	5.49	2.5
225	5.50	(1.1)	263	5.45		301	5.58	(0.9)
226	5.50	0.4	264	5.50	(1.8)	302	5.57	0.6
227	5.51	0.7	265	5.52	(1.0)	303	5.55	1.2
228	5.52	1.1	266	5.53	(1.8)	304	5.48	0.4
229	5.50	1.4	267	5.56	1.2	305	5.51	0.8
230	5.50	1.2	268	5.53	2.0	306	5.58	(0.9)
231	5.48	1.0	269	5.53	2.3	307	5.58	0.9
232	5.50	(2.1)	270	5.49	1.6	308	5.50	1.5
233	5.52	0.6	271	5.47	4.1	309	5.51	0.8
234	5.52	0.4	272	5.54	(1.3)	310	5.48	1.6
235	5.50	0.9	273	5.56	(1.9)	311	5.53	1.1
236	5.46	0.7	274	5.55	(3.9)	312	5.55	1.5
237	5.48	0.3	275	5.52	1.1	313	5.54	1.3
238	5.50	0.9	276	5.51	2.0	314	5.53	1.8
239	5.48	0.8	277	5.49	1.3	315	5.54	2.4
240	5.46	1.0	278	5.51	1.7	316	5.52	(1.7)
241	5.46		279	5.47	2.5	317	5.58	(0.7)
242	5.51	2.0	280	5.50	(1.2)	318	5.57	0.9
243	5.53	(1.6)	281	5.55	(0.9)	319	5.52	0.9
244	5.50		282	5.54	1.0	320	5.52	0.3
245	5.49	1.2	283	5.55	1.3	321	5.49	0.2
246	5.50	0.3	284	5.54	(0.8)	322	5.52	0.3
247	5.50	0.5	285	5.55	1.3	323	5.59	(1.1)
248	5.51	0.8	286	5.55	5.5	324	5.59	0.3
249	5.50		287	5.53	1.7	325	5.56	0.8
250	5.49	(1.7)	288	5.63	(0.6)	326	5.54	0.8
251	5.49	0.5	289	5.59	1.7	327	5.52	0.2

第4表 I区第4面 水田跡一覧表(2)

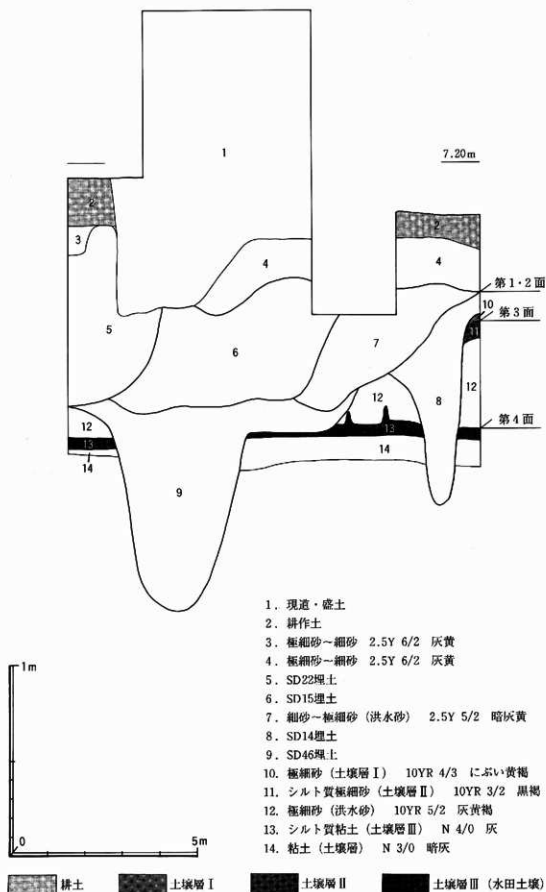
No.	標高(m)	面積(m ²)	No.	標高(m)	面積(m ²)	No.	標高(m)	面積(m ²)
328	5.52	0.5	366	5.58	0.6	404	5.63	(1.2)
329	5.55	0.6	367	5.55	0.5	405	5.62	(5.2)
330	5.56	0.4	368	5.62	(0.2)	406	5.64	2.2
331	5.55	0.5	369	5.63	(1.2)	407	5.64	4.5
332	5.53	0.6	370	5.60	0.8	408	5.63	4.0
333	5.53	0.6	371	5.58	4.5	409	5.62	5.5
334	5.52	0.7	372	5.58	2.6	410	5.61	4.6
335	5.53	(0.4)	373	5.57	1.8	411	5.58	2.6
336	5.62	(1.5)	374	5.56	1.2	412	5.57	5.1
337	5.62	1.4	375	5.56	0.8	413	5.57	2.6
338	5.59	1.6	376	5.56	0.9	414	5.57	3.1
339	5.54	1.1	377	5.40	0.6	415	5.56	1.7
340	5.53	0.7	378	5.53	0.4	416	5.59	0.8
341	5.54	1.0	379	5.52	0.5	417	5.58	0.6
342	5.52	1.1	380	5.52	0.9	418	5.57	0.4
343	5.54	0.8	381	5.54	0.5	419	5.55	0.3
344	5.55	0.8	382	5.55	0.5	420	5.55	(0.2)
345	5.53	0.9	383	5.55	(0.4)	421	5.66	(0.6)
346	5.52	0.8	384	5.62	(0.8)	422	5.66	(0.9)
347	5.53	1.0	385	5.55	2.1	423	5.63	1.4
348	5.53	0.6	386	5.63	1.4	424	5.62	3.8
349	5.54	0.9	387	5.64	(0.3)	425	5.62	0.5
350	5.55	(0.4)	388	5.61	1.4	426	5.64	2.2
351	5.63	(0.6)	389	5.59	(4.1)	427	5.64	1.7
352	5.59	1.7	390	5.57	3.3	428	5.65	1.3
353	5.55	1.3	391	5.60	3.2	429	5.62	4.2
354	5.54	0.8	392	5.61	1.5	430	5.63	3.5
355	5.53	0.7	393	5.59	0.8	431	5.62	2.9
356	5.56	0.7	394	5.56	0.7	432	5.62	2.1
357	5.52	1.6	395	5.55	0.7	433	5.60	2.5
358	5.53	1.0	396	5.59	0.6	434	5.59	0.9
359	5.54	0.8	397	5.54	1.4	435	5.57	0.8
360	5.50	0.4	398	5.54	1.0	436	5.58	1.2
361	5.69	(0.6)	399	5.54	0.7	437	5.56	0.8
362	5.62	1.3	400	5.56	0.3	438	5.54	0.9
363	5.60	0.5	401	5.56	0.5	439	5.55	0.7
364	5.58	0.9	402	5.56	0.3	440	5.57	(0.7)
365	5.56	0.9	403	5.66	(0.3)	441	5.58	(1.0)

第5表 I区第4面 水田跡一覧表(3)

No.	標高(m)	面積(m ²)	No.	標高(m)	面積(m ²)	No.	標高(m)	面積(m ²)
442	5.58	(0.7)	480	5.67	(1.1)	518	5.69	1.6
443	5.71	(0.4)	481	5.63	1.1	519	5.71	1.5
444	5.69	(2.5)	482	5.66	3.0	520	5.70	3.7
445	5.71	4.7	483	5.68	1.2	521	5.71	2.5
446	5.67	1.3	484	5.69	(1.2)	522	5.71	4.1
447	5.67	2.7	485	5.64	1.7	523	5.73	1.3
448	5.60	1.7	486	5.66	1.7	524	5.70	3.5
449	5.65	2.7	487	5.66	1.9	525	5.70	2.0
450	5.64	2.4	488	5.67	1.4	526	5.72	(2.8)
451	5.62	1.5	489	5.69	(1.0)	527	5.73	(0.4)
452	5.64	2.2	490	5.65	1.1	528	5.70	2.4
453	5.61	2.5	491	5.65	2.5	529	5.73	1.7
454	5.60	2.3	492	5.67	4.1	530	5.71	2.1
455	5.60	1.4	493	5.68	1.1	531	5.71	0.7
456	5.60	1.5	494	5.70	1.5	532	5.73	3.6
457	5.58	0.8	495	5.68	0.6	533	5.71	1.8
458	5.57	0.7	496	5.65	(0.6)	534	5.69	2.1
459	5.54	1.1	497	5.66	2.3	535	5.70	0.8
460	5.61	1.8	498	5.67	3.5	536	5.71	3.3
461	5.59	2.0	499	5.68	3.6	537	5.70	0.3
462	5.58	1.6	500	5.68	1.7	538	5.74	(5.3)
463	5.58	1.0	501	5.66	0.7	539	5.73	2.3
464	5.57	1.2	502	5.65	1.3	540	5.73	2.6
465	5.62	1.2	503	5.69	0.3	541	5.75	1.4
466	5.62	3.0	504	5.67	(0.4)	542	5.70	0.6
467	5.61	2.8	505	5.65	1.7	543	5.72	3.0
468	5.60	1.9	506	5.67	1.4	544	5.70	0.7
469	5.58	2.7	507	5.68	0.4	545	5.73	1.9
470	5.58	1.6	508	5.72	2.0	456	5.73	3.2
471	5.63	0.5	509	5.67	1.9	547	5.73	3.1
472	5.64	(0.8)	510	5.72	3.2	548	5.75	(5.4)
473	5.62	(0.1)	511	5.69	2.1	549	5.74	(7.2)
474	5.60	3.9	512	5.68	(1.0)	550	5.73	0.8
475	5.63	0.8	513	5.69	(4.3)	551	5.73	5.9
476	5.66	(1.0)	514	5.69	3.2	552	5.78	10.2
477	5.62	2.6	515	5.68	1.3	553	5.74	6.5
478	5.63	3.8	516	5.69	2.7	554	5.73	3.2
479	5.75	1.5	517	5.68	1.7	555	5.78	3.4

第6表 I区第4面 水田跡一覧表(4)

No.	標高(m)	面積(m ²)	No.	標高(m)	面積(m ²)	No.	標高(m)	面積(m ²)
556	5.77	3.7	593	5.74	(2.3)	630	5.77	3.3
557	5.72	(6.3)	594	5.76	(1.2)	631	5.76	4.2
558	5.76	(0.2)	595	5.78	1.7	632	5.75	3.2
559	5.75	(0.4)	596	5.76	3.0	633	5.75	5.9
560	5.75	1.4	597	5.77	4.1	634	5.78	(1.0)
561	5.74	2.1	598	5.77	1.6	635	5.86	(2.2)
562	5.75	7.5	599	5.79	2.3	636	5.83	7.2
563	5.76	4.1	600	5.78	0.7	637	5.80	6.5
564	5.78	0.8	601	5.75	3.0	638	5.79	8.5
565	5.76	1.6	602	5.77	2.6	639	5.79	9.1
566	5.82	(0.4)	603	5.80	(0.2)	640	5.76	9.2
567	5.81	6.3	604	5.76	2.6	641	5.77	(6.8)
568	5.83	2.3	605	5.78	3.0	642	5.78	(0.4)
569	5.77	1.2	606	5.76	5.4	643	5.85	(2.0)
570	5.77	1.8	607	5.77	3.3	644	5.85	3.8
571	5.79	1.0	608	5.73	1.7	645	5.84	1.9
572	5.72	3.4	609	5.73	3.9	646	5.82	5.2
573	5.77	(4.5)	610	5.74	2.6	647	5.81	0.8
574	5.87	(2.2)	611	5.78	(2.1)	648	5.78	12.7
575	5.83	0.7	612	5.81	1.6	649	5.84	1.8
576	5.83	4.9	613	5.81	1.7	650	5.81	0.8
577	5.82	6.0	614	5.75	5.4	651	5.78	2.3
578	5.76	5.7	615	5.77	2.3	652	5.79	7.9
579	5.78	0.9	616	5.75	1.1	653	5.76	1.5
580	5.75	2.4	617	5.77	3.6	654	5.78	2.9
581	5.79	5.1	618	5.75	4.2	655	5.79	6.6
582	5.78	10.4	619	5.74	(2.4)	656	5.78	(1.1)
583	5.74	2.2	620	5.82	(5.2)	657	5.78	(2.0)
584	5.76	8.5	621	5.82	3.1	658	5.87	(2.7)
585	5.72	5.0	622	5.78	9.3	659	5.86	1.5
586	5.79	(3.0)	623	5.76	4.9	660	5.83	(0.6)
587	5.76	1.9	624	5.76	1.7	661	5.85	(5.7)
588	5.76	3.3	625	5.77	5.4	662	5.82	(7.1)
589	5.77	5.1	626	5.73	10.0	663	5.84	(7.0)
590	5.78	6.2	627	5.77	(2.2)	664	5.80	(1.0)
591	5.76	1.6	628	5.85	(4.1)	665	5.80	(0.1)
592	5.77	6.0	629	5.81	5.1			



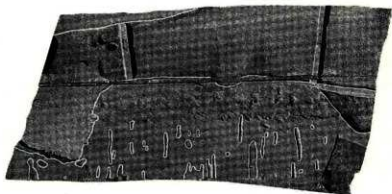
第47図 II区基本土層

第3節 II区の調査

1. 調査の概要

(1) 基本層序

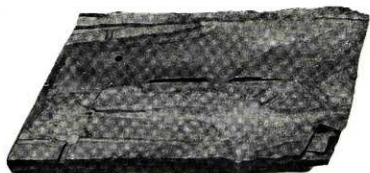
- はじめに** 当地区においても、第3章第1節で報告した基本層序と同じである(第47図)。ただし、後述するように、当地区は幅6mの市道(大野美乃利線)部分の調査であることから調査範囲が限られている。加えて、第1面と第2面で検出した溝状遺構が第4面よりも深くまで掘り込まれている。このため、I区のような良好な状態で各土壌層を検出することはできなかった。ただし、溝状遺構の影響がおよばなかった所では、各土壌層が認められた。
- 現耕作土** 当地区の大半が市道部分の調査であるため、調査区の北東側と南西側でわずかに認められた。当土壌層と土壌層Ⅰの間には灰黄色極細砂～細砂からなる旧水田土壌層と床土の互層が認められた。この互層は多くて5組確認することができた。
- 土壌層Ⅰ** にぶい黄褐色極細砂1層からなる。
土壌層Ⅰの下層は、黄褐色極細砂層が認められた。基本的には土壌層Ⅰと同一堆積によるものと考えられる。この層の堆積は厚くはなく、ところによっては全く認められない箇所も認められた。
- 土壌層Ⅱ** 黒褐色シルト質極細砂からなる水田土壌層である。
土壌層Ⅱの下層は灰黄褐色極細砂1層からなる。土壌層Ⅱと同一の堆積によるものと考えられる層で、その層相から洪水による堆積と考えられる。土壌層Ⅱも含めて約55cmの堆積が認められる。
- 土壌層Ⅲ** 灰色シルト質粘土からなる水田土壌層である。
土壌層Ⅲの下層も土壌化が顕著な暗灰色粘土で、土壌層Ⅲと同一堆積によるものと考えられる。この層が水田土壌であるのかについては、第4章第8節のプラントオパール分析の結果を参照されたい。



第1面



第2面

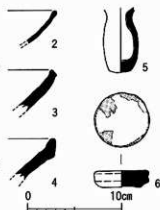


第3面

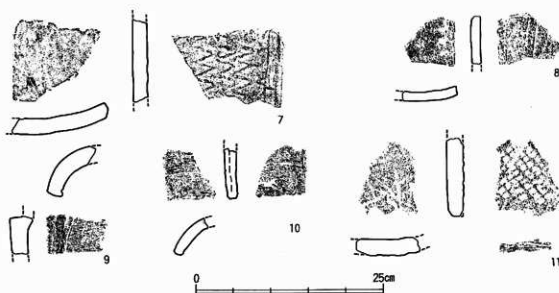
第48図 II区の遺構

(2) 土壌層と遺構の検出

- 第1面から第4面の4面にわたり遺構を検出している。
- 第1面 土壌層Ⅰの上面で検出した遺構で、その層上の違いから、第1面(1)と第1面(2)とに分けて遺構を検出した。
- 第1面(1) 灰色系の埋土を主体とする遺構である。鋤溝と奈良時代～平安時代にかけての溝(SD15)を検出している。鋤溝については、Ⅰ区で検出した鋤溝と一連のものと考えられる。
- 第1面(2) 褐灰色系の埋土を主体とする遺構で、溝状遺構を検出している。出土遺物から奈良時代と考えられる。
- ただし、当遺構面を検出する際に出土した土器をみると、



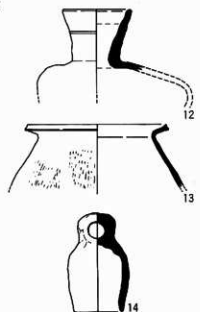
第49図 Ⅱ区第1面(2)出土土器



第50図 Ⅱ区第1面(2)出土瓦

平安時代後期から鎌倉時代にかけてのもの(第49図)も少なからず認められる。瓦についても、时期的には当該期に位置付けられる。したがって、当遺構面で検出した溝状遺構は、この時期に埋没した可能性も考えられる。

- 第2面 土壌層Ⅰの下面、つまり土壌層Ⅰを掘り下げた土壌化の認められないレベルで検出している。当面においても、検出した遺構は溝状遺構と柱穴がある。奈良時代の土器も出土しているが、時期を明確にできるのは弥生時代中期から後期の遺構である。
- 第3面 土壌層Ⅱの上面で検出している。Ⅰ区第3面(2)に対応する面である。水田跡のみ検出している。
- 第4面 土壌層Ⅲの上面で検出している。Ⅰ区第4面に対応する面である。水田跡のみ検出している。



第51図 Ⅱ区第2面出土土器

2. 第1面(1)の調査

(1) 概要 (図版24 写真図版22)

検出した遺構は鋤溝と溝状遺構に限られる。

- 鋤溝** 全て一定方向を示すものである。後述するSD15を検出した範囲においては認められなかった。このため両者の前後関係については調査においては明確にできなかった。
- 溝** SD15の1条のみである。調査区やや北西側で、ほぼ直線的にのびる溝である。

(2) 調査の結果

鋤溝 (図版24)

- 検出状況** 当遺構面の大半をSD15が占めているが、これ以外の箇所でも検出した。小規模な溝がほぼ同一方向に認められるもので、小規模な溝は楕円形に近い。
- 形状・規模** 北西-南東方向にのびるほぼ直線的な溝で、N48°Wを指向する。横断面はU字形を呈する。検出した長さは、10cmから2.57m以上とバリエーションが認められる。検出面における幅は20-60cmと一定ではないが、約30cmがほぼ平均的な規模である。最深部における検出面からの深さは、深くても10cmである。
- 出土遺物** 埋土内からは遺物の出土は認められなかった。
- 時期** 埋土から判断して、鎌倉時代以降と考えられる。

SD15 (図版24)

- 検出状況** II区の北東辺から南西辺に向かって調査区を縦断するように流れ、南西部ではかなり幅が広まり、淀みあるいは溜まり状になっている。また、北東部でも切り合いはあるものの溜まり状の部分のみ認められる。II区のおよそ半分の面積がこの溝で占められている。
- 形状・規模** 溝の方向は北東から南西である。長さは25.1mが検出された。幅は検出面で9.8-4.35m、溝底で8.25-3.40mを測る。断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは77cmである。溝底の標高は北東端で6.25m、南西端で5.98mであり、北東方向から南西方向へ流れていたものと思われる。
- 埋没状況** 大きく3つに分けられ、最上層の1層は細砂を含むオリブ灰色シルト、4-6層は灰-黄灰色シルト-細砂のラミナ、2・3層及び7-9層はオリブ灰-灰色シルトである。この溝は第11図にみられるように長尾と池ノ内の小字の境界に当たっている。条里に伴うもので、近世あるいは道路舗装以前まで存続していた水路と考えられる。
- 出土遺物**
- 須恵器** 136-139と141は須恵器である。136は坏葦で、内面に薄く墨が付着しており、転用視の可能性はある。137は坏Aである。口縁部が直線的に広がるタイプである。138は碗の底部で、139は壺の底部でいずれも高台が付く。なお139の内面に自然釉が付着している。141は把手であり、器種としては甕と考えられる。
- 土師器** 140と142は土師器である。140は皿である。暗文は無く、全体に煤けている。142は鉢である。口縁端部を除き、全体に横方向の板ナデを施している。
- 時期** 出土遺物から8世紀後半に掘削され、11世紀以降まで存続したものと考えられる。

3. 第1面(2)の調査

(1) 概要 (図版25 写真図版23)

ほぼ直線的にのびる2条の溝を検出したのみである。両溝とも途中で直交方向に分岐しており、この箇所においてSD19がSD20を切っている。

(2) 調査の結果

SD19 (図版25 写真図版112)

- 検出状況** II区の南東半部をおおよそ調査区の長辺に平行して流れる形で検出された。SD20を切っている。
- 形状・規模** 溝の方向は北東から南西であるが、長さは19.5mが検出された。幅は分岐している部分を除き、検出面で0.75～3.35m、溝底で0.45～2.50mを測る。中程で幅が広まり、かつ多方向に分岐している。断面はU字形を呈し、検出面からの深さは29cmである。溝底の標高は北東端で6.17m、南西端で6.13mであり、北東方向から南西方向へ流れていたものと思われる。
- 埋没状況** 埋土は3層に分けられ、上層から褐灰色シルト混じり細砂、灰黄褐色シルト混じり細砂、褐灰色シルトであり、いずれもいわゆる洪水砂である。
- 出土遺物** 出土した遺物のうち、148・149・152が土師器であり、それ以外は須恵器である。143は坏Aで焼きがやや不良で、144は皿で内外面に火ダスキがみとめられる。いずれも比較的浅手のものである。145～149は高台のある底部である。145は壺の可能性がある。145・146の内面には多方向の仕上げナデが施されており、147も仕上げナデが認められる。148の外面には赤色顔料が塗られているようである。149は碗の高台で、断面は特徴的な三角形である。150は壺の口縁部で軸のため調整は不明である。151は平底の甕の底部であるが、叩きは認められず、ナデで仕上げられている。152は土師質の鎗壺で釣鐘形のタイプである。
- 時期** 出土遺物から、奈良～平安時代(8～10世紀)と考えられる。

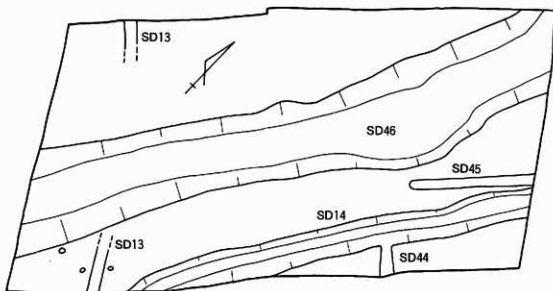
SD20 (図版25)

- 検出状況** II区の南東半部を調査区の長辺に平行して流れる形で検出された。SD19に切られている。
- 形状・規模** 溝の方向は北東から南西である。長さは16.6mが検出された。幅は検出面で40cm～1.5m、溝底で25～40cmを測る。断面は皿形を呈し、検出面からの深さは9cmである。溝底の標高は北東端で6.34m、南西端で6.29mであり、北東方向から南西方向へ流れていたものと思われる。
- 埋没状況** 埋土は断面図では2層に分層し、上層は黄灰色細砂、下層は褐灰色シルトである。他の部分では埋土は1層で褐灰色シルト質極細砂であった。
- 出土遺物** 全く出土していない。
- 時期** 奈良時代以前と考えられる。

4. 第2面の調査

(1) 概要 (図版26 写真図版24)

II区第2面では、調査区を斜めに横切る溝SD46、それとほぼ平行に流れる溝SD14が主な遺構である。ほかに小規模な溝SD44・SD45、I区から続く溝SD13および3個の柱穴が検出されている。



第52図 II区第2面の遺構

(2) 調査の結果

SD44

検出状況 II区の南東辺でSD14から分岐する形で検出された(第52図)。

形状・規模 溝の方向は北東から南西である。長さは1.6mが検出された。幅は検出面で40~65cm、溝底で34~40cmを測る。断面は皿形を呈し、検出面からの深さは28cmである。溝底の標高は北西端で6.12m、南東端で6.15mを測り、南東方向から北西方向へ流れていたものと思われる。

埋没状況 2層からなり、上層は灰黄褐色シルト混じり細砂、下層は褐色細砂混じり極細砂である。

出土遺物 全く出土していない。

時期 判断できない。

SD45

検出状況 II区の北東辺に向かって流れる形で検出された(第52図)。SD14の北西にある。

形状・規模 溝の方向は北東から南西であるが、長さは6.20mが検出された。幅は検出面で50cm~60cm、溝底で25~30cmを測る。断面は皿形を呈し、検出面からの深さは12cmである。溝底の標高は北東端で6.06m、南西端で6.11mを測り、南西方向から北東方向へ流れていたものと思われる。

埋没状況 1層からなり、褐色細砂混じりシルトである。

出土遺物	全く出土していない。
時期	判断材料を欠くため、明確にできない。
	SD46 (図版26-32 写真図版25・113-118・177・178)
検出状況	Ⅱ区の北コーナーから南コーナー付近に向かい、調査区全体を大きく斜めに横切って流れる形で検出された(第52図)。
形状・規模	溝の方向は北東から南西である。長さは27.2mが検出された。幅は検出面で3.4-5.15m、溝底で1.75-3.35mを測る。断面は浅いU字形を呈し、検出面からの深さは1.40mである。溝底の標高は北東端で4.91m、南西端で4.64mであり、北東方向から南西方向へ流れていたものと思われる。
埋没状況	8層ないし11層からなるが、3つないし4つに大分することができる。1層ないし1-3層は灰色シルトあるいは褐灰色のシルト(またはラミナ)で最初はこの部分のみを溝と認識していた。それ以下は基本的にはラミナで炭化物や植物遺体を含んでいる。
出土遺物	土器と石器が出土している。
土器	弥生時代中期と後期の土器が出土している。
中期	壺・甕・複合土器・鉢・高坏・蛸壺・ミニチュアが出土している。
壺	広口壺・直口壺・無頸壺などが出土している。
広口壺	直立する頸部に対して口縁部が外反し、端部を上下方向に拡張するタイプを基本とする。153は、口縁部に5条の帯を原体とする縞状紋が施されている。縞状紋の幅は7mmである。体部には、いずれも5条からなる帯描直線紋2帯と帯描波状紋3帯が施文されている。154・155・157の口縁部には、帯描波状紋が施文されており、155の頸部には刺突紋が認められる。156は体部片であるが、12条からなる帯描直線紋と帯描波状紋が施文されている。
直口壺	体部に対して口縁部が斜上方にのびるもの(165-170)と、直口するもの(171・172)の2タイプが認められる。両タイプとも頸部から口縁部にかけて凹線紋が施文されている。166は肩部に把手が付くもので、頸部には突帯を貼り付けたあと、その上にキザミ目が施されている。167は、口縁部と頸部の凹線紋の下側に、それぞれヘラ先によるキザミ目が施されている。また、168の頸部の凹線紋の下側にも、同様のキザミ目がわずかに認められる。
無頸壺	脚が付くタイプ(173-177)と付かないタイプ(178-180)とが認められる。前者は、体部外面をヘラ磨きにより丁寧に仕上げられているのに対して、後者はハケもしくはナデ調整により仕上げられている。
底部	固化しなかったものを含めて比較的多く出土している。調整が観察できる個体はいずれも、外面をヘラ磨きにより仕上げられている。184の内面は、縦方向のヘラ削りの後、ハケ調整により仕上げられ、上部には煤の付着が認められる。また187は、底部中央を径約2cmの穿孔が認められるが、穿孔後は未調整となっている。
その他	188は、無頸壺のミニチュアである。径5mmの紐穴が2箇所認められる。内外面ともナデ調整により仕上げられている。

第3節 II区の調査

壺 基本的な形態は同じであるが、体部外面中位にキザミ目を施すもの(200~203)と施さないもの(189~199)とが認められる。

前者は、大型(200・201)・中型(202)・小型(203)の3タイプに分類できる。また、キザミ目の施文方法も、一方向に施すものと、201のように綾杉状に施すものとが認められる。また203のキザミ目は不揃いで、キザミ目そのものの長さも短い。

後者も、大型(189~191)・中型(192~196)・小型(197~199)の3タイプが認められる。

底部は、内面をナデ調整により仕上げるものと、縦方向のヘラ削りにより仕上げるものの2タイプが認められる。いずれも、器壁が薄く仕上げられている。

複合土器 215の1個体である。口縁部がわずかに残存するのみである。口縁部下端に断面三角形の突帯が貼り付けられ、その外面にはキザミ目が施されている。

鉢 把手付台付鉢・底部・ミニチュアが出土している。

把手付 体部と把手のみ残存する。体部は内外面とも丁寧なヘラ磨きにより仕上げられている。口縁部は強い横むようなナデ調整が施されているため、外面は凹線状を呈する。

底部 2個体出土している。2個体とも底部から体部下半にかけての残存で、底部を指抑えにより成形している。

ミニチュア 219の1個体である。内外面ともナデ調整により仕上げられている。内面にヘラ先で整形した際のヘラ先圧痕が認められる。

高 坏 いわゆる木器形高坏と皿形高坏とからなり、後者のほうが量的に多い。

木器形 法的に、大型のもの(220)と小型のもの(221・222)の2タイプに分類できる。

皿 形 当タイプで、調整が観察できるものはすべて、内外面とも横方向の丁寧なヘラ磨きにより仕上げられている。ただし233は、体部外面を縦方向の弱いヘラ削り、内面を縦方向のハケ調整後、ヘラ磨きで仕上げられているが、その範囲は口縁部に限られる。

当タイプは体部が皿形を呈するものであるが、その形態により、浅いタイプと深いタイプに分類できる。また、口縁端部の形態においてもバリエーションが認められる。

脚 部 長脚のものと短脚のものとが認められる。長脚・短脚とを問わず、体部との接合部が残存するものは、239を除いてはすべて円板充填法によっている。

234は、体部との接合部に8条の、脚中央部に11条の凹線紋が施文され、両者の中間部に7ヶ所キザミ目が施されている。また脚下半には8ヶ所に円孔が穿たれており、各円孔の間にキザミ目が8ヶ所に施されている。円板充填法によらない239には、体部との接合部と脚中央部にヘラ描沈線紋が施されている。

蛸 壺 いずれも飯蛸壺に分類されるものである。各個体とも指オサエ・ユビナデにより整形されている。体部の形態において、砲弾形をなすものとコップ形をなすものとが認められる。前者は径約1.5cm前後の円孔を一つ穿つものに対して、後者には円孔は認められない。ただし、後者のタイプについては完存するものがないため、円孔が穿たれるものもある可能性が考えられる。

後 期 蓋・甕・鉢・紡錘車が出土している。

蓋 やや突出する頂部をもち、体部は直線的に開く。調整は内面が横方向のケズリで、外面

は不明である。

変 タタキが確認できるもの(261・264)と確認できないもの(263)の2つにわけることができる。263は内外面ともハケ目調整の後、ナデが施されている。264は底部と体部で調整が異なっており、底部外面が斜めのタタキ、内面が縦方向のハケ目調整であるのに対し、体部は外面が横方向のタタキ、内面が横方向のハケ目である。

鉢 焼成前に開けられた孔を有する有孔鉢である。全体に磨滅しており、タタキの痕跡も明確に残っていないが、右上がりのタタキがわずかに観察できる。

他 紡錘率が出土している。平面形は円形に近く、直径4mmの円孔が穿たれる。

石器 S48・S49はサヌカイト製の石鏃である。S48は欠損のため基部の形状は不明であり、S49は円基式の石鏃で、やや小型で細手に属するものである。長さ2.2cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、重さ0.8g。

S50は磨製石包丁で、おそらく中央付近で折れたものである。孔は2つで、刃は片刃で直線刃である。美しい緑灰色を呈する良質の石材は、緑色片岩である。

S51・S52は砥石である。S51は平面形が台形の定型化された砥石であるが、下端は折れている。石材は凝灰質砂岩である。S52は現存の平面形は長方形に近い形状である。焼けており、鋳型の可能性もある。上端および図化した裏面は欠損している。石材は流紋岩質凝灰岩である。

S53・S54は磨石である。S53は平面形は楕円形で、全体の形状は円筒形の上下をまるく彫らせた形である。側面に著しい擦痕がある面があり、側面を利用して研磨を行ったものと思われる。長さ5.5cm、幅4.8cm、厚さ3.1cm、重さ114.8g。石材は、石英安山岩である。S54は平面・側面とも楕円形で、いわゆる円礫をそのまま利用したものである。長さ4.45cm、幅3.9cm、厚さ3.4cm、重さ79.5gである。石材は流紋岩質火砕岩である。

時期 弥生時代中期後半以降に埋没していったものと考えられる。

SD14 (写真図版26)

概要 調査区の南東隅で検出した。北東-南西方向にはほぼ直線的にのびる、I区第2面から続く溝である。北東端は調査区外までのびている。II区で21m検出した。SD44と直交しているが、調査では切り合い関係は明確にできなかった。

なお、溝の規模・埋没状況等については、I区で報告した通りである。第1節(50ページ)を参照されたい。

5. 第3面の調査

(1) 概要 (図版33 写真図版26)

当遺構面全域にわたって水田跡を検出した。I区第3面(2)から続くものである。

(2) 調査の結果

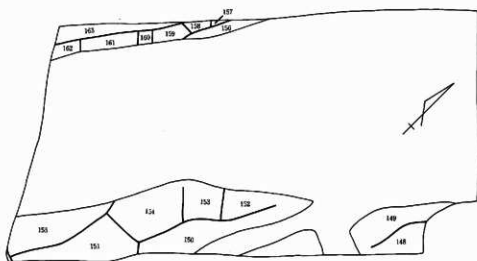
水田跡 第3面は上面の遺構により残存している面積がごくわずかであったが、その全域で水田跡を検出した。その面積は1,096㎡に及ぶ。

畦 畔 畦畔は一部検出幅46cmと広い部分がある。他は基本的には同規模の幅で、いわゆる大畦畔・小畦畔の区別はないものと思われる。断面は台形を呈し、畦の幅は検出面で20cm前後、底で30-40cmを測る。水田面からの高さは3-9cmである。

平面形 水田の区画は一区画が完存するものがほとんどなく、規模や平面形は不明であるが、おそらく台形のもの为主体であろう。

標 高 水田の標高は残存部分が少ないため傾向がつかみにくいが、南ほど低くなる傾向がみられる。最も高い水田面で6.36m、最も低い水田面で6.20mと16cmの比高差が認められる。

なお、各区画の詳細については、第7表を参照されたい。



第53図 II区第3面 水田跡

第7表 II区第3面 水田跡一覧表

()内は検出面積

No.	標高 (m)	面積 (㎡)	No.	標高 (m)	面積 (㎡)	No.	標高 (m)	面積 (㎡)
148	6.36		154	6.25	(5.8)	160	6.31	(0.1)
149	6.36		155	6.20	(5.2)	161	6.30	(0.5)
150	6.27		156	6.34		162	6.30	(0.5)
151	6.25	(7.4)	157	6.32		163	6.30	
152	6.31	(2.0)	158	6.34	(0.3)			
153	6.31	(2.8)	159	6.33	(0.6)			

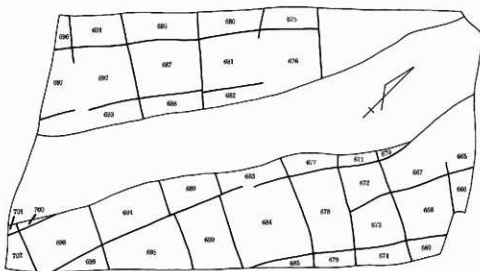
6. 第4面の調査

(1) 概要 (図版33 写真図版27)

当遺構面全域にわたって水田跡を検出した。Ⅰ区第4面に対応するものである。

(2) 調査の結果

- 水田跡** 第4面は第3面より残存する面積が広く、そのほぼ全域で水田跡を検出した。その面積は1,096㎡に及ぶ。
- 畦 畔** 畦畔は基本的には同規模の幅で、いわゆる大畦畔・小畦畔の区別はこの範囲では認められない。断面は台形を呈し、畦の幅は検出面で15~20cm、底で40cm前後である。水田面からの高さは2~4cmである。
- 平面形** 水田の区画は比較的正方形や長方形に近いものが多く、全体に整った印象を与える。これは、畦畔がほぼ直交し、交点でくいちがう場合が少ないためである。
- 面 積** 各区画の面積は比較的揃っており、狭い区画で3.2㎡、広い区画で13.5㎡、平均で7.44㎡程度である。
- 標 高** 水田面の標高は、南側ほど低くなる傾向がみとめられる。最も高い水田面で5.84m、最も低い水田面で5.72mと12cmの比高差がみとめられる。

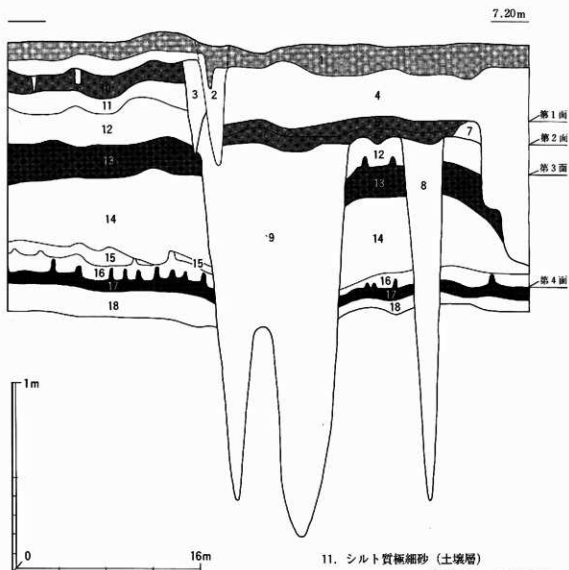


第54図 Ⅱ区第4面 水田跡

第8表 Ⅱ区第4面 水田跡一覧表

()内は検出面積

No.	標高 (m)	面積 (㎡)	No.	標高 (m)	面積 (㎡)	No.	標高 (m)	面積 (㎡)
665	5.78	(4.8)	678	5.82	8.0	691	5.78	(3.8)
666	5.85	(1.7)	679	5.81	(1.1)	692	5.70	7.5
667	5.80	(5.3)	680	5.76	(3.6)	693	5.71	(4.9)
668	5.81	(6.3)	681	5.75	(7.0)	694	5.77	(6.9)
669	5.85	(1.5)	682	5.73	(1.9)	695	5.78	(9.9)
670	5.77		683	5.77	(3.0)	696	5.74	(0.8)
671	5.77	(0.4)	684	5.79	13.5	697	5.71	(4.4)
672	5.80	3.2	685	5.81	(4.0)	698	5.74	7.3
673	5.84	4.6	686	5.78	(4.7)	699	5.76	(1.4)
674	5.85	(2.0)	687	5.71	8.0	700	5.73	
675	5.80	(2.2)	688	5.71	(2.4)	701	5.72	
676	5.79	(8.0)	689	5.76	(3.9)	702	5.74	(1.5)
677	5.77	(1.7)	690	5.79	(6.9)			



- | | | |
|---------------------|--------------------|----------------|
| 1. 耕作土 | 11. シルト質極細砂 (土壌層) | 10YR 5/3 にぶい黄褐 |
| 2. シルト質極細砂 5Y 6/1 灰 | 12. シルト質細砂 | 10YR 6/4 にぶい黄橙 |
| 3. SD16埋土 | 13. シルト質極細砂 (土壌層Ⅱ) | 10YR 4/2 灰黄褐 |
| 4. シルト質極細砂と極細砂の互層 | 14. シルト質細砂 (洪水砂) | 10YR 7/4 にぶい黄橙 |
| 5. シルト質極細砂 (土壌層Ⅰ) | 15. シルト質極細砂 | 10YR 7/4 にぶい黄橙 |
| 6. シルト質極細砂 (土壌層Ⅰ) | 16. シルト質極細砂 (水田土壌) | 2.5Y 7/1 灰白 |
| 7. 極細砂質シルト (土壌層) | 17. シルト質粘土 (土壌層Ⅲ) | N 3/0 暗灰 |
| 8. SD47埋土 | 18. 粘土 (土壌層) | N 3/0 暗灰 |
| 9. SD48埋土 | | |
| 10. シルト質極細砂 (土壌層Ⅰ) | 10YR 4/2 灰黄褐 | |

耕土
 土壌層Ⅰ
 土壌層Ⅱ
 土壌層Ⅲ (水田土壌)

第55図 Ⅲ区基本土層

第4節 III区の調査

1. 調査の概要

(1) 基本層序

当地区においても、第3章第1節で確認した基本層序が認められた(第55図)。上から、現耕作土、土壌層Ⅰ、土壌層Ⅱ、土壌層Ⅲの各土壌層が確認でき、各土壌層間は間層によって分離している。

現耕作土 一見したところ平坦であるが、当地区の北側を扇形に流れる用水路を境に、その北東側では若干高くなる傾向が認められる。

当土壌層の下層は、灰色極細砂と灰黄色シルト質極細砂の互層となっている。前者が水田土壌、後者がその床土に対応する。後述するように、土壌層Ⅰが上記の用水路を境として北側が明確な段差をもって高くなっている。このため、互層は用水路より北側では1層確認できるのみであるのに対して、用水路より南側では多箇所では5層確認できる。

土壌層Ⅰ 灰黄褐色シルト質極細砂からなる。南側においては2層からなるが、堆積構造上は顕著な差は認められなく、土壌化の度合いの差によるものと考えられる。先述したように、用水路を挟んだ北側と南側で明確な段差が認められる。その規模は約30cmにも及ぶ。ただし、当土壌層が堆積当初からこのような段差があったのではなく、北側から南側への傾斜地に対して、その傾斜の最も顕著な箇所に用水路を設け、かつその両側を平坦化させようとした結果と考えられる。

当土壌層の下層は、用水路より北側に厚く、南側に薄く堆積している。これは、用水路より南側を平坦化させるための削平による結果と考えられる。北側にはぶい黄褐色シルト質極細砂、ぶい黄褐色シルト質細砂の2層が、南側にはぶい黄褐色シルト質細砂1層が堆積している。ぶい黄褐色シルト質極細砂については、若干の土壌化が認められる。

土壌層Ⅱ 灰黄褐色シルト質極細砂からなる。当土壌層は第2面で検出したSD48により切られている。そして、この溝を境に、北側と南側とでは約15cmほどのレベル差が認められる。加えて、この溝の南側は水田土壌になっている。これは、当層の水田化にあたっては、平坦化の必要があり、この結果、当初北側から南側へ傾斜していた当層のうち、水田化する箇所を中心に削平を伴う平坦化がなされたためと考えられる。

当土壌層の下層は約40~50cmの厚みをもつぶい黄褐色シルト質砂の堆積が認められる。この層は洪水に起因する堆積層である。

土壌層Ⅲ 暗灰色シルト質粘土からなる水田土壌層である。当層の下層についても土壌化した暗灰色粘土からなる。



第1面



第2面



第3面



第4面

第56図 III区の遺構

(2) 土壌層と遺構の検出

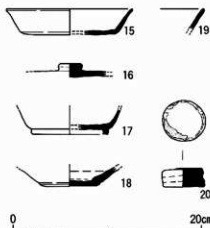
当地区においても、第1面から第4面の4面にわたって遺構を検出している。

第1面 土壌層Ⅰの上面で検出した遺構である。灰黄色系と暗灰色系を埋土とする遺構との2種類が認められ、前者を第1面(1)、後者を第1面(2)として遺構を検出した。

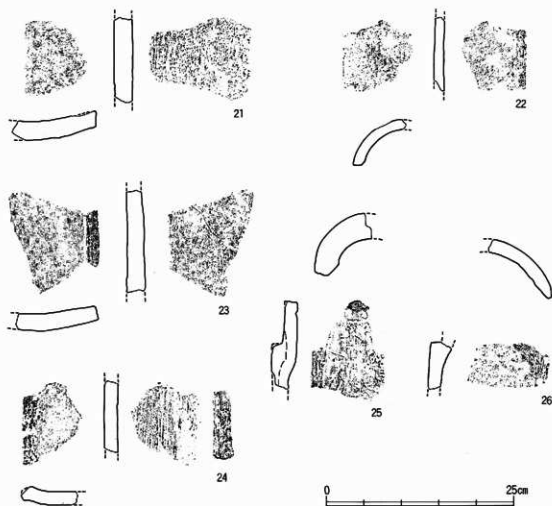
第1面(1)で検出した遺構は、鋤溝と用水路の上層(SD16上層)に限られる。鋤溝については時期を特定できないが、Ⅰ区・Ⅱ区で検出した鋤溝とはほぼ同様の時期と考えられる。用水路の上層については、近世以降と考えられる。

第1面(2)では、掘立柱建物跡・溝・竈跡を検出している。掘立柱建物跡と竈跡については、前項で土壌層Ⅰが一段高くなっていると報告した範囲で検出され、逆に一段低くなっている箇所では溝と掘立柱建物跡を検出した。

これらの遺構は、土器を伴うものに関しては、



第57図 Ⅲ区第1面(2)出土土器



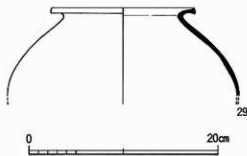
第58図 Ⅲ区第1面(2)出土瓦

第4節 III区の調査

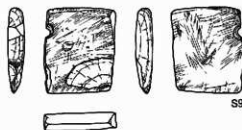
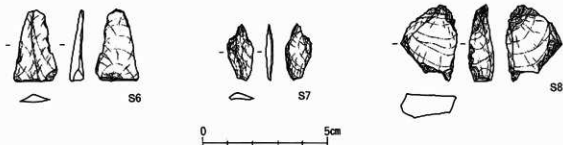
平安時代後期から鎌倉時代にかけての時期に位置付けられる。瓦（第58図）についてもほぼ同様の時期が考えられる。ただし、当遺構面を検出するにあたって出土した遺物（第57図）をみると、上記の時期の土器はもちろんのこと、奈良時代の土器も少なからず出土していることから、遺物を伴わない遺構については、当該期まで遡る可能性も考えられる。

第2面 土壌層Ⅰの下面、つまり土壌層Ⅰを掘削し、土壌化の認められないぶい黄褐色あるいは黄橙色シルト質細砂上面で検出している。柱穴・土坑・溝を検出している。

土器を伴う遺構に関しては、いずれも弥生時代前期～後期の遺構である。土壌層Ⅰを掘り下げ第2面を検出する際に出土した土器についても、弥生時代前期と中期のものが出土しており、上記の時期に合致するものである。



第59図 III区第2面出土土器



第60図 III区第2面出土土器

また、SD48については、幅11m・深さ2.10mと調査で検出した溝状遺構のなかで突出した規模を測り、当遺跡を取り囲む環濠として機能していたものと考えられる。

第3面 土壌層Ⅱの上面と下面で検出した遺構である。前述したように、第2面で検出したSD48を境に当土壌層にレベル差が認められたが、一段低い南側は水田土壌となっており、この上面で水田跡を検出している。逆に、一段高い北側についてはその下面で柱穴・木棺墓・土坑を検出している。土坑内から弥生時代前期の遺物が出土しているため、他の遺構についてもほぼ同じ時期と考えられる。また、水田跡についても、Ⅰ区・Ⅱ区第3面で検出した水田跡に続くことから、弥生時代前期と考えられる。

第4面 土壌層Ⅲの上面で検出している。Ⅰ区・Ⅱ区第4面から続く水田跡を検出している。